

文化財実習報告書 第7集



2025

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

2024 年度 文化財実習の概要

1. 実習概要

文化財実習は、文化遺産調査で基本となる文化財の取り扱いや調査・写真記録の取り方、科学機器を用いた調査、調査報告のまとめ、活用などに関する講義を実践してきた。今年度は、文化遺産分野にて利活用が進む3次元計測（写真測量）を最初に学習した後、資料の写真撮影について学修した。次に、調査の実例を座学で学ぶとともに、顕微鏡、蛍光 X 線分析装置、赤外分光分析装置、X 線透過撮影装置、赤外線写真カメラ、分光測色器による分析調査実習や室内にてドローン体験を行った。他に、調査報告作成や文化財活用、広報など学芸分野で必須の技能となる illustrator や InDesign、Premiere を用い、ポスター作成を中心に基本操作の習得を目指した。なお、実習中に調査・分析した資料展示を龍谷大学大宮学舎東翼1階エントランホールにて令和6年12月から令和7年2月まで行った。実地見学では、座学で伝えられない埋蔵・伝世文化財の修理作業について奈良市と天理市の施設を見学し、様々な知見を得る機会となった。



展示風景（東翼1階エントランホール）

実習は、杉山洋・山田卓司が担当し、ティーチングアシスタントとして阿部・熊谷・長嶋が補佐した。実習参加者は、下記の通りである。

受講生

仏教学科 富田 実織

歴史学科 文化遺産学専攻 高橋 一馬、網本 光真、木下 珠里、寺矢 拓斗、眞鍋 倅生、中村 京香、工藤 麗奈、原田 しいな、阿江 佐知子、青木 悠、大崎 留果、出島 奨、濱口 葵、諫本 凌太朗、齊藤 宗一郎、藤支 大道、馬場 菜摘、梅津 幸太郎、尻池 千紗、藤原 菜穂子、長谷川 咲弥、寺島 涼平、昆 成見、辻 成実、池田 天、西村 侑花、高垣 柚香、坂東 佳達、大田 悠月、箭野 颯真、上村 祥太、西川 大陸、矢田 有沙、鈴木 さくら、高尾 悠介、坂元 美天、河村 萌花、大下 未結、廣橋 真於、永立 明利、岡本 渉聖、藤田 勇雅、水上 采音、根本 力也、渡辺 早希、中野 聡志、黄 篠、張 海鵬
(計50名)

2. 実地見学について

2-1. (令和6年8月7日)元興寺文化財研究所

約60年にわたり埋蔵・伝世文化財の調査研究および修復に携わる公益財団法人元興寺文化財研究所（奈良市南肘塚町）を訪ねた。元興寺文化財研究所は、奈良市菅原遺跡の発掘調査、国宝島根県荒神谷遺跡出土銅剣の修理、重要文化財奈良県メスリ山古墳出土大型円筒埴輪の修理、ユネスコ世界記憶遺産登録資料白樺日誌の調査、発掘された日本列島の展示・運送などの開催支援業務など、幅広い文化財の調査・修理・活用を行う調査研究機関である。

研究所の見学では、全体説明を受けた後、埋蔵文化財保存研究グループ（金属器・土器）、文化財調査修復研究グループ（伝世品・記録資料）を見学し、実際の調査・修理作業を目の前で見ながら、各作業の工程について専門員から説明を聞き、質問に対する回答を受けた。

2-2. （令和6年8月22日）なら歴史芸術文化村

奈良県内の仏像等彫刻、絵画・書跡等、歴史的建造物、考古遺物の修復作業現場を行うなら歴史芸術文化村（奈良県天理市）を訪ねた。仏像等彫刻、絵画・書籍等は国宝修理装演師連盟所属の組織により當麻寺所蔵の曼荼羅図や仏像を始め奈良県内絵画・書籍・仏像等の修理が、歴史的建造物は奈良県地域創造部文化財保存事務所のもと多坐弥志理都比古神社本殿の修理が、考古遺物は天理市教育委員会文化財課による天理市内出土品整理作業が実施されていた。

見学では、芸術文化体験棟にて杉山先生による全体説明を受けた後、文化財修復・展示棟にて実際の調査・修理作業を目の前で見ながら、質疑応答に答えた。その後、特別展「文化財修理の現場から」を見学し、修理における知見を深めた。



見学風景（なら歴史芸術文化村）

2-3. 見学レポートについて

時間的な制約などはあったが整理や展示、調査、修理現場を実際に訪れた。発掘資料の整理・展示や文化財の修理、文化財行政の実際を知ることは、今後の卒論や研究で直接関連する学生にとって幅広い知見を得るよい機会になったものと思われる。行動制限もなくなり、見学を機に積極的に現場へ赴き、質問する気概を学生には期待したい。以降では、上記見学先で学生が自ら感じた感想や事後学修での調査をレポートにまとめたものを学籍番号順に掲載する。また、上記日程に参加できなかった学生は、帰省先などで紹介したい博物館を自主的に見学しレポートにまとめている。

なお、業務等が忙しい中、見学の説明などで時間を融通していただいた見学先の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

3. 文化財実習レポート

紙資料の保存と修復について

L210782 高橋一馬

元興寺文化財研究所に見学に行った際、様々な文化財の保存修復の現場を目にすることができた。そこで私は紙資料の保存修復について興味を持った。今回は幅広い紙資料の保存修復の中から近代における紙媒体記録資料の保存修復技術についてレポートする。

まず見学の際の説明や元興寺文化財研究所のパンフレットから得られた情報をまとめる。日本の古文書の大敵は東アジア特有の高温多湿な気候と害虫である。古来からこの湿気と害虫から古文書を守るため様々な工夫がなされているが、地方に残されている近世文書の中には湿気や虫食いで利用できないほど傷んだ文書が大量にある。元興寺文化財研究所では世界的な基準である修復の4原則である原型保存・可逆性・安全性・記録に留意しながら、資料にとって安全な材料と技法を選択している。近現代になって作成された洋紙の公文書や図書類のなかで特に酸性紙の劣化を抑制するためには、化学的な薬品処理をすることが必要である。紙の中の酸を中和するためにアルカリ性の薬剤を本紙に噴霧して中和処理を施す。なるべく早い時期に適切な延命処置を施すことで資料を後世に伝えることが可能となるのである。

次に私が紙資料の保存修復について調べたことをまとめる。「資料への保存処置」というとほとんどの人が傷んだ資料を治すこと、修復することをまず思い浮かべる。1947年に発見された『死海写本』は聖書考古学におけるもっとも重要な発見と言われているが、見つかった皮の巻物に明らかに製作当時（ほぼ2千年前）、欠損部を修復したと思われる跡がある⁽¹⁾。傷んだ資料を「治す」処置、すなわち修復処置は、対象物は異なれ、人間が記録物を生み出したときから現在まで変わらず行われてきた。

紙媒体記録資料においても同様である。ここで冊子形態の近世文書を対象にした治す技術を簡単に述べる。処置前の状態の調査とチェックののち、必要ならば冊子資料は毎葉（1枚ずつ）に解体され、

ドライ・クリーニングと言われる、乾いた状態での塵埃・虫糞・カビ等の汚れ落としが施される⁽²⁾。

次に紙の中の汚れと、経年により紙中に蓄積された可溶性の酸化物や酸性化物を除くため、紙を洗う。そして、本来丈夫な和紙資料であっても、大気中の酸を吸収していたり、カビが生み出す酵素による繊維の分解で酸性度が高くなっているものには水性での脱酸性化処置が施される⁽³⁾。これは洗浄では洗いだせない、紙の奥深く潜む酸性化物をアルカリで中和する処置である。洗浄と脱酸性化は紙を媒体とした資料の修復では最も重要な工程であり、最終的な仕上がりの善し悪しを決定していく。

次に虫やカビにより欠損した部分の物理的な補填が行われる。裏打ち、そして必要ならば表打ちする技術は昔から使われてきたが、紙漉きの原理を応用し、欠損部にだけ紙の繊維を流し込んで補填するリーフ・キャストイングという技術が1980年代末に海外から日本へ導入され、各工房への導入が進み、補填作業は格段に合理化、洗練されている⁽⁴⁾。こうして科学的・物理的処置を終えた毎葉は再び綴じあわせられ冊子形態に復元される。

今回の見学によって文化財修復の最前線を体験することができてとても有意義であった。紙資料の保存修復技術も長い年月を経て様々な合理的な方法が使われているということを知ることができた。

参考文献

- (1) 木部徹「近代の紙媒体記録資料の保存修復技術」『情報の科学と技術』60号 2010年 61頁
- (2) 前掲註(1) 62頁
- (3) 前掲註(1) 62頁
- (4) 前掲註(1) 62頁

元興寺文化財研究所を見学して

L22095 富田実織

私たちがみている博物館などでみている文化財が、きれいな状態でみれているということは、文化財研究所で働いている方たちのおかげであるということが分かった。実際に修復が行われている場面をみることはないので、実際に見学して改めて実感しました。文化財を修復するだけでなく、保存台や保存

箱、展示の支援も一緒に行っているということが分かった。修復と言っても、文化財に合わせて様々な修復方法があるということが分かった。

伝世資料の絵馬を修復していた場所では、扉が開けられていたので、温湿度をしっかりと保たなくても、大丈夫であるのかが気になりました。

薬剤につける際に一斉に薬剤につけるため、崩れた破片がどこかにいかないように、網でくるくるとすることも知りませんでした。また単体でとりにくいものや、土ごと持ってくるときには、ウレタンで包み、文化財研究所で除去作業をすることも知りませんでした。

金属製品には絶対に X 線をあてるということが分かった。X線をあてることによってどれくらいさびているか、劣化の状況を調べるのに最適であるということが分かった。CTスキャナーによって内部の構造や製作技法、修理履歴、虫害の状況を調べることができるとことが分かった。またさびてしまわないように、脱塩処理を行い、アクリル樹脂を浸透させて、塗布させることがわかった。青銅製品にはベンゾトリアゾルで今の状態よりもさびないようにさせることが分かった。

木製品の保存修理では、水の中でなくても保管できるように、薬剤含浸が行われていることが分かった。

虫穴を埋めるために、リフキャストという修復の仕方があるということがわかった。洋書では和紙に比べて、酸化しやすいため、アルカリ性の薬剤で中和させて、薄い和紙補強するということが分かった。

文化財の輸送には美専車が必要であるが明確な規定はないが、運転席と荷室が別で荷室は文化財に適した温湿度であるということ、免震があり、鍵がかかることが条件であるということが分かった。また元興寺文化財研究所に止めてあった美専車には太陽光パネルによって荷室の空調管理ができるということが分かった。

参考文献

公益財団法人元興寺文化財研究所要覧

元興寺文化財研究所総合文化財センター施設見学の手引き

今回修復工房の見学ツアーに参加して一番驚いたことは、四種類の工房があった事です。考古資料の修復工房を想像して行ったので建造物、絵画・書籍、仏像まで幅広く扱っているのは凄いなと思いました。また、全ての工房が別の会社・機関が担当していることも驚きました。

歴史的建造物修復工房では、修復後も出来るだけ当時と変わらないようにするために現在では使われていない鉞や槍鉋などを使うなど徹底しているなと思いました。人目に全くつかない場所は現代の方法で修復することで工期の短縮を図るなど、当時の技法と現代の技法のハイブリッドで効率を良くしながらもしっかりとした修復を行うのは凄いなと思いました。働いている宮大工の人達は奈良文化財保存事務所に雇われていると知って、雇用の創出にも貢献している素晴らしい事業だなと思いました。考古資料修復工房では、どの人がどこの考古資料を何しているのか表示されておりとても分かりやすいなと思いました。絵画・書跡等修復工房では、強度や薄さなど性質の違う紙を使い何層にも重ねて保護していることを初めて知りました。仏像等彫刻修復工房では、仏像をオーバーホールして修復しており普段では中々見られない光景でした。また、當麻寺の金剛力士像など大型の仏像にも対応しているので修復の幅が広がるなと思いました。そして、仏像の修復は美術院が行っていることに驚きました。見学ツアーの解説がとても詳しくて知識が無い人でも十分わかりやすいと思いました。

最初は文化財の修復をより身近で感じてもらうために見学無料という事もあり簡単な修復作業を公開してるものだと考えていたけれど、実際は奈良県の指定文化財などを中心に本格的な修復作業しており、このような施設は他にはないとても威力的なものだなと思いました。このような施設がもっと普及すれば文化財に興味を持ってくれる人が増え、将来の担い手が今まで以上に増えるのではないかと思います。

元興寺文化財研究所見学レポート

L221002 木下珠里

今回、文化財実習の夏季見学会において元興寺文化財研究所を見学させていただいた。

私は元興寺文化財研究所について、文化財の科学分析や保存処理については他の講義などでいくつかの事例を耳にしたことがあったため、漠然と分析と保存処理をしているところというイメージを持っていた。しかし、今回の見学会ではじめに元興寺文化財研究所の概要を説明していただき、資料・遺物・遺跡などの発掘や調査、科学分析、保存処理、修復、活用に至るまでの文化財にかかわるありとあらゆる分野を担っており、それぞれ保存処理法の研究・文化財の分析調査・保存環境の調査などを行う保存科学グループ、遺跡から発掘された木製品・金属製品・土器・土製品の保存処理を行う埋蔵文化財保存研究グループ、人文的調査・伝世品の修理・発掘調査などを行う文化財調査修復研究グループ、写真撮影・赤外線撮影・3D 計測・レプリカ作成・展示台や保管台の作成・展示支援を行う文化財企画活用室の4つのグループに分かれて文化財の保存活用に取り組まれていることがわかった。

また、施設内の見学を通して、X 線を使用した分析についてこれまでも専攻科目の講義で X 線が文化財の様々な分析に使用されていることは学んできたが、石膏や接着剤で一度復元された土器を X 線透過装置で撮影することで、彩色された石膏とオリジナルの土器を判別したり石膏や接着剤の劣化状態を把握したりできることを初めて知り、文化財の状態を把握するのに初期調査だけでなく、その後の修復の際にも用いられていることに驚いた。そして、X 線 CT 画像も内部構造の確認など文化財の事前調査に役立つだけでなく、CT 結果などから穴の位置や大きさ、革紐の跡などの情報が得られ、それを基に文化財企画活用室においてより正確な復元模造が作成されるとお聞きし、各グループが独立して個別に作業をしているのではなく、1つの研究所の内部組織として協力しながらより良い文化財の保存活用のために研究されているとわかった。

今回の見学会によって、今まで写真や言葉でしか見たことがなく漠然としたイメージであった文化財の調査分析・保存処理・修復・活用に実際に取り組まれている現場を見ることができ、大変勉強になった。元興寺文化財研究所は主に木製品、石造物、紙資料、埋蔵文化財を扱っているとのことだったので、それらについて今後も知見を深めつつ、他の素材によってつくられた文化財の保存修復についても学んでいきたい。

文化財実習夏季見学会レポート

L221004 寺矢拓斗

2024 年 8 月 7 日に元興寺文化財研究所を訪ねた。元興寺文化財研究所の始まりとしては元興寺の解体修理とその防災工事に伴う発掘調査で発見された約 10 万点にも及ぶ中世庶民信仰資料の性格解明と保存を目的として、元興寺に設置された中世庶民信仰資料調査室から始まったという。この元興寺文化財研究所では文化財などの保存修理、調査と分析、活用の3つの要素からなり、様々な専門分野を持った所員がそれぞれの視点と見識を活かして、経験と技術を蓄積せきするとともに継承し、文化財の保存と活用に取り組んでいることがわかった。この見学会では色々な研究室を見学して回りながら説明を受けることができ、様々な遺物の保存処理方法について詳しく学ぶことができた。人文考古学研究室では発掘調査で持ってきた遺物を研究室で調査し、出土金属製品の保存処理を行っていることが分かった。保存修理を行う手順としてはまず、処理前に検査し写真撮影をしてから、サビ取りを行い、次に防錆、強化処理を行ってから樹脂塗布をしてから接合や復元を行う。その後は処理後調査をしてやっと保存処理が完了する。処理前検査から処理後調査までとても丁寧に遺物を扱い残していこうとしていることが分かった。紙資料の保存修復と調査の研究室では近現代資料用紙の復元の様子を見ることができた。ここでは世界的な基準である修復の4原則である原型保存、可逆性、安全性、記録をモットーにしながら資料にとって安全な材料と方法を模索していることが分かった。近現代資料用紙の

復元ではアルカリ性の薬剤を用いて劣化を遅らせ、シバンムシなどの虫害にあった資料で紙がくっついて開かなくなった資料については丁寧にピンセットやヘラで一枚ずつクリーニングしながら開き、破片を仮止めしていることを知ることができた。X線撮影室では保存処理前と保存処理後に写真撮影を行うのは、保存修理の作業によって資料がどのように変化したか比較し調べることができるといことが分かった。今回の見学会では実際に見て、話を聞くことができたので分かりやすく面白かった。

元興寺文化財研究所見学会の感想

L221005 眞鍋倅生

はじめに

私はこの夏、元興寺文化財研究所に見学に行った。今回はその時に得た知見や感想を述べていきたいと思う。

元興寺文化財研究所とは

1943年から1961年まで行われた元興寺極楽堂・禅室などの解体修理とその防災工事に伴う発掘調査で発見された約10万点のも及び資料の解明と保存を目的として、元興寺に設置された中世庶民信仰資料調査室が始まりである。

昭和53年には、文化財全般の保存処理・修復や調査研究に対応するため、財団法人元興寺文化財研究所へと改称した。そして、平成25年に内閣府の認可を受けて、公益財団法人に移行した。

元興寺文化財研究所の取り組み

元興寺文化財研究所の仕事は「調査・分析」、「保存修理」、「活用」の3つからなる。

「分析・調査」には、人文考古学と保存科学の分野があり、人文考古学の分野では史資料の総合調査や遺跡の発掘調査が、保存科学の分野では、資料の材質や構造、劣化の調査・分析、保存修理に用いる材料の選定や開発、保存修理後の状態調査・保管環境調査がある。この両分野は、それぞれが関わり合い、総合的、多角的な視点で行っている。

「保存修理」には、金属製品や木製品、土製品などの埋蔵文化財を扱うものと、古文書や記録資料などの紙資料や、民俗資料や仏像などの伝世資料

を扱うものの2つの部門があり、「調査・分析」から得られた情報や技術を基に保存修理を行っている。

「活用」では、上記2つの成果をもとにした復元模造品・レプリカ作製や保存台・保存箱などの作製のほか、博物館や美術館などの展示支援を行うことで資料の利用につなげるだけではなく、関連学会への報告や公開講座などで情報公開を行っている。

見学の感想

今回の見学会で私が一番興味を持ったことは、土器の保存修理である。私が訪れた時も所員の方々が土器の保存修理をしていた。3〜4つぐらいの土器の保存修理を行っており、アクリル樹脂を接着剤にして破片を接合していた。その作業は非常に緊張感を感じ、真剣な所員の方々の目を見ることができた。接着中は接着剤が完全に固まるまでしっかりと固定しており、その光景がまるでビルを建てているように見えた。

一方で、補彩を行っている所員もいた。補彩とは、アクリル樹脂絵具や顔料を使って、復元した部分に着色する作業であるが、家形埴輪に対してその作業をしていた。その遺物に違和感なく色を付けていくのは非常に難しい作業だなと実際に見て思った。

おわりに

元興寺文化財研究所で、遺物の保存修理や活用などの活動を実際に見られて、非常に勉強になった。元興寺文化財研究所の保存修理のレベルと環境整備の高さを改めて実感した。

〈参考文献〉

・公益財団法人元興寺文化財研究所総合文化財センター施設見学の手引き 公益財団法人元興寺文化財研究所 2019年

・公益財団法人元興寺文化財研究所要覧 公益財団法人元興寺文化財研究所 2021年

元興寺文化財研究所を見学して考えたこと

L221007 中村京香

私は8月7日に奈良県に所在する元興寺文化財研究所を訪れた。

昭和18年(1943年)から昭和36年(1961年)まで行われた元興寺における解体修理や発掘

調査で約 10 万点もの中世庶民信仰資料が見つかったことによってその調査研究がはじまったことが現在の元興寺文化財研究所につながっているという。そして、現在の元興寺文化財研究所では金属製品や木製品、紙資料というように材質や形状、大きさ等の異なった多様な文化財が扱われている。また、この研究所では発掘調査をはじめとした文化財の「調査・分析」や先述のような様々な文化財の「保存修理」、さらにレプリカ作製や公開講座といった文化財を「活用」する仕事が行われている。このようにこの研究所では多様な文化財を扱う上にその業務内容も多岐にわたることを知った。加えて、このような幅広い業務は保存研究グループ、文化財調査修復研究グループ、埋蔵文化財保存研究グループ、文化財企画活用室といった4つのグループでそれぞれ分担し、業務にあたられていることを知った。これらのことから、この研究所が多くの文化財を後世まで守り伝えていくために担っている役割が非常に大きいことを理解した。

また、実際に元興寺文化財研究所内にある様々な部屋を見学し、金属器保存処理室や土器修復室など、多くの部屋が存在し、先述の多岐にわたる業務に対応していることを実感した。

そして、実際に業務されている様子を見学し、その中で伝世品の修理に対して興味を持った。

見学した際には、伝世品のうち女乗物の両扉の障子の調節が行われていた。この女乗物は水害の被災資料で、熊本県人吉市から依頼されたものであった。この女乗物は漆が塗られていたり、金属の部分があったり、内部に華やかな日本画が飾られていたりするなど、単一の材質のものではなく、漆・金属といった様々な材質のものによって構成されていた。このように単一ではなくさまざまな材質からなる文化財においては、それぞれの材質ごとに劣化の仕方や劣化に対する保存修理の手法が異なってくるため、特に保存修理を行うのが難しいのではないかと考えた。水害の被害を受けた直後の女乗物の状態については分からないが、見せていただいた女乗物は美しく、水害の被害を感じさせないものであった。そのため、文化財に関して幅広い業務を担う

元興寺文化財研究所だからこそ、成せる技であると考えた。

また、水害といった自然災害による文化財の損傷は、災害大国である日本では大きな課題となっていると考えられる。自然災害による被害を未然に防いだり、被害を受けたとしてもその被害が小規模におさまるようにしたりすることはもちろん大切であるが、自然災害によって被災した文化財がもとの姿へ修理するための技術の継承についても重要であると実感した。

参考文献

公益財団法人元興寺文化財研究所『公益財団法人元興寺文化財研究所要覧』2021 年、5-6頁

元興寺文化財研究所を見学して

L221008 工藤麗奈

私は、2024 年 8 月 7 日に講義の一環で奈良市にある元興寺文化財研究所を見学した。元興寺文化財研究所は、平城京遷都にともない法興寺が新築移転されたことでできた元興寺での、建造物や美術工芸品の解体修理、収蔵庫建設、防災工事にともなう発掘調査によって発見された約 10 万点の仏教民俗資料を保存し研究することからはじまった研究所である⁽¹⁾。

はじめに、職員の方に、元興寺文化財研究所の概要について説明していただいた。私は文化財研究所の仕事について、文化財の調査研究と保存修理が主な仕事で、外部の人々にとっては距離が遠いものであるというイメージを以前は抱いていた。しかし、元興寺文化財研究所では、保存修理に使われる機械や技術の解説や展示を行っていたり、研究成果を公開するために特別展示や文化財講座を開いたりすることで、一般の人々の文化財を後世へ伝えるという意識を高めるための普及活動を行っていたり、各地の博物館などの公開施設における展示業務の支援を行っていたりと、「開かれたもの」であることがわかった。

続いて、研究所の各部屋を見学した。調査研究・修復資料・写真撮影といった各課程や資料の材質ごとに部屋が分かれており、それぞれ適切な環境が

保たれている中で職員の方が作業をされていた。一人ずつ集中して作業をされている部屋があれば、複数人で協力して作業を行っている部屋もあったことが印象に残り、文化財の性質に合わせ臨機応変に作業していくことの大切さを感じることができた。私が特に興味を抱いたのは土器の保存修復作業である。破片を接合させる作業や文様を復元していく作業は繊細で根気のいる作業であるが、その分達成感を感じることができるのではないかと考える。元興寺文化財研究所を見学して、文化財を後世へ伝えていく際の文化財研究所がもつ役割の大きさを学び、職員の方々の文化財に対する熱量や高度な技術を直接見ることができ、大変有意義な見学であった。

註(1) 元興寺文化財研究所『公益財団法人元興寺文化財研究所要覧』2021年、2頁

元興寺文化財研究所を訪れてみて

L221009 原田しいな

8月7日に元興寺文化財研究所の見学に訪れた。元興寺文化財研究所では、主に文化財調査、保存処理・修復を行なっている。

私が元興寺文化財研究所を訪れて、印象に残ったことや感じたことは二つある。

一つめは、文化財の修復場所を主に紙資料・木製品・金属製品に分けていたことである。修復部屋を文化財の素材ごとに分類することで、より効果的かつ効率的に行う工夫がされていた。また、各素材ごとでも、さらにそれぞれの文化財に適した保存処理・修復が必要であることを学んだ。例えば、同じ木製品であっても、文化財に使用されている木材は多種にわたり、それぞれの木材の種類に適した保存処理・修復を行う必要がある。

保存処理・修復には手順があり、例えば金属製品においては、①処理前調査②サビ取り③脱塩・BTA処理④樹脂含浸⑤コーティング⑥接着・復元⑦保管台の作製⑧処理後調査といった8段階がある。また、どの素材の文化財にもあてはまるが、文化財の保存処理では“これまでの劣化”に加えて、“これ

からの劣化”も重視して処理することが大切であるということも学んだ。

二つめは、さまざまな機械を用いて文化財の分析を行なっていたことである。研究所には、光学顕微鏡や電子顕微鏡、蛍光X線・X線回析・赤外分光をはじめ多くの装置が備わっていた。文化財の保存処理・修復を行うにあたって、文化財の分析は必要不可欠であり、自然科学的な分析を通して初めてそれぞれの文化財に適した処理を行うことが可能である。

私は博物館等で、文化財がすでに保存処理・修復済みのものを鑑賞していたが、実際に文化財の保存処理・修復を行なっている過程をこの度初めて見ることができ、また、修復を行なっている方々はまさに文化財のドクターだと思った。文化財の保存処理・修復には、多くの機械や道具が使用されているが、文化財自体を修復するのは人間であって、現在の人々が先人たちのように、後世に文化財を遺していこうという意識が何よりも重要であると感じた。

《参考資料》

公益財団法人元興寺文化財研究所総合文化財センター『公益財団法人元興寺文化財研究所要覧』2021

公益財団法人元興寺文化財研究所総合文化財センター『施設見学の手引き』2017

夏季見学レポート

L221010 阿江 佐知子

私は8月7日に奈良県の元興寺文化財研究所総合文化財センターを見学させて頂いた。このように実際に文化財の保存や修復、調査を行っている施設を見学できるというのは貴重な機会であるので、見学させて頂くことが出来てよかったと思う。

私が今回見学した中で印象に残っているのは紙資料の保存修復と調査で、特に虫害にあった資料に対して行う漉嵌(リーフキャスト)という技法である。私は今まで紙資料の保存・修復については学んだことが少なく、この技法についても初めて聞いた。

日本は高温多湿な気候であり、文書が虫食いや破れによる被害を受けることも多い。シバンムシなど

の虫害にあった文書は虫の糞や汚れてページがくっついてしまい開かなくなる場合もある。そのような虫損資料は一枚ずつピンセットやヘラでクリーニングしながら開き、破片を仮留めしていく。開くことができた文書は裏側から水に分散させた和紙の繊維を流し込み、水の流れを利用して、本紙の虫穴や周囲に和紙の繊維をはめ込む。穴の埋まったシートをプレスしながら自然乾燥させると、本紙の和紙繊維と流し込んだ和紙繊維が水素結合して、糊を使わずに虫穴を繕う修理することが出来る。この修復技法を漉嵌法という技法という。

この漉嵌法の特徴として、資料の虫食いや破損、欠損部分のみ修復用繊維が充填されるため修復後も資料の厚みは変わらないということが挙げられる。従来の裏打ちによる修復では失われてしまう簾の目やウォーターマークなどの情報も、リーフキャスト法を施した修復は、触ったり、透かして見るにより確かめることが出来る。また、両面に文字情報が書かれた資料の修復にも適した技法で、修復後も、変わらず文字を読み取ることが出来るのである。

これらの紙資料の保存・修復以外にも木製品や金属製品の保存・修復の方法について詳しく知ることが出来た。今回は中々普段入ることが出来ない作業の場を実際に見ることが出来たため、今後この経験を活かしもっと文化財の修復や保存についての理解を深めていきたいと思う。

参考文献

東京修復保存センター 代表的な修復の方法
http://www.trcc.jp/1st_restoration.html

文化財実習夏季見学レポート

L221011 青木悠

夏季見学として、元興寺文化財研究所を見学した。元興寺文化財研究所は3つの要素からなる。人文考古学と保存科学の2分野からなる「調査・分析」、埋蔵文化財を扱う部門と伝世資料を扱う部門からなる「保存修理」、そして復元模造品やレプリカ等の作成、展示支援を行う「活用」である。「調査・分析」は人文考古学と保存科学の両分野が双方に

関わり合い、総合的・多角的な視点で行われる。「保存修理」は「調査・分析」で得た情報や技術をもとに行われる。そして、調査・分析および保存修理で得られた成果をもとに「活用」がなされる。

見学した中で最も印象にあるのは伝世品資料の修復である。伝世資料とは、製作された当初から現在に至るまで、守り伝えられてきたあらゆる資料のことである。伝世資料には、民俗資料や彫刻、石造品、工芸品などが含まれている。また、これらの伝世資料は使われることで破損していたり、仏像等の彫刻類は大切であるという認識から、人目を避け、隔離された場所にあることで、次第に虫や小動物により被害を受けて劣化する。元興寺文化財研究所はそうした被害から資料を守り伝えるため、伝統的な修理方法や保存科学の考え方を生かした方法や材料により保存修復を行っていることが、実際に見学して分かった。

伝世資料の修復に限った話ではないが、仏像の手などのように、修復することが文化財の意味を整える作業であるという話はとても興味深かった。また、伝世資料の材質は様々であるため、そうした材質や環境に合わせた上での修復方法を考える必要があることを改めて感じた。

今回の見学では、元興寺文化財研究所がどのような組織で、どのような取り組みを行っているかということを見学することができた。修復や保存活用の仕方とそれらにおける様々な技術・方法等を知ることができ、文化財を守り伝えていくことの重要性について改めて考える機会となった。

参考文献

公益財団法人元興寺文化財研究所,2021,「公益財団法人元興寺文化財研究所要覧」
公益財団法人元興寺文化財研究所,2019,「元興寺文化財研究所総合文化財センター施設見学の手引き」

元興寺文化財研究所見学レポート

L221012 大崎留果

私は、今回、元興寺文化財研究所を見学して、実際に文化財の修復現場を見るという貴重な体験をすることができた。元興寺文化財研究所では、文化

財の調査や分析、保存処理が行われているが、その他にも、復元模造品やレプリカ作製が行われていると知って驚いた。

今回の見学は、人文考古学研究室、金属器保存処理室、土器修復室、考古整理室、記録資料修復室、X線撮影室、撮影場などを順に見ていき、職員の方にそれぞれの部屋での作業について教えていただいた。部屋の前には作業内容を説明したパネルが設置されており、職員の方のお話と合わせてさらに理解を深めることができた。そのなかでも私が印象に残ったのは、金属器保存処理室と土器修復室での作業である。

金属器保存処理室は、遺物の錆取りや脱塩処理、樹脂含浸、復元などを行う部屋である。鉄製品と銅製品は、それぞれ部屋を分けて扱っており、製品が混ざることのないように注意を払っているようだ。また、これまでは樹脂の含浸についてあまり理解していなかったが、アクリル樹脂を遺物へ含ませることによって酸素と水分の遮断ができたり、アクリル樹脂の、硬化しても溶剤で取り除けるという性質により、次また保存処理をする際に遺物を傷める心配がなかったりなど、保存処理の方法やその意味を知ることができた。

土器修復室は、土器の破片に残った接着剤や石膏を取り除いたあと、破片を接合し、文様も含めて元の姿に戻す作業を行う部屋である。接合の際にはアクリル樹脂を使い、失われた部分や文様の復元にはエポキシ樹脂を用いるなど、2つの樹脂を使い分けていることを初めて知った。大きめの土器は破片の数も多く、形をきれいに保ちながら接合していくのは非常に大変そうだと感じたが、実際に土器を接合している場面を見て、その技術の高さに感動した。

今回の見学を通して、文化財の保存処理や修復について新しい学びを得ることができた。また、実際に作業をしている場面を見ることもできて、文化財についてさらに理解を深められるよい経験となった。

参考

- ・元興寺文化財研究所 総合文化財センター 施設見学の手引き
- ・公共財団法人元興寺文化財研究所要覧

元興寺文化財研究所を見学して

L221013 出島 奨

2024年8月8日水曜日、元興寺文化財研究所を見学させていただく貴重な機会があった。文化遺産学専攻に属しているものの、実際の修復現場を見ることは今回が初めてだった。本レポートでは元興寺文化財研究所を見学して感じたことなどを中心に述べていきたいと思う。

まず感じたことは、保存修理をしている現場は数多くあったが、一口に保存修理と言っても様々な分野があることを痛感させられた。例えば金属製品の保存修理では、金・銀・銅など様々なパターンがあるため、その金属によって保存修理の方法を変えていく必要がある。彩色資料では高精細デジタル修復製作にも取り組んでいると仰っており、元興寺文化財研究所は、文化財に合わせて様々な修復ができるようにあらゆる機能を備えた万能型施設なのだと感じた。

また資料の記録撮影を行っている部屋も案内していただいた。その時は記録撮影自体は行っていなかったのだが、その文化財の形状を把握したり、目には見えない細かい割れ目などの部分を確認するために必要なとても作業だと感じた。文化財実習の授業でカメラ撮影のトレーニングをしたばかりであったので、少し身近に感じる事ができた。

また元興寺文化財研究所という名前から、お寺関係の文化財が多いのではと勝手に思っていたのだが、そんなことはなく日本全国時代を問わず、ありとあらゆる文化財が集結していたことに驚いた。様々な分野の人が集まることにより、互いの経験を活かしてより良いアドバイスができ、今後の文化財修復にとってとても良い環境だと感じた。

最後に、いくら知識があっても、職人さんたちの技術がないと文化財は守れないのだと感じた。今日において文化財が守られているのは、職人さんたちの長年の熟練された技術あってこそだと感じた。

参考文献

- 元興寺文化財研究所『公益財団法人 元興寺文化財研究所要覧』2021年

なら芸術文化村を見学した感想

L221015 諫本 凌太郎

2024年8月22日、なら芸術文化村を見学した。文化材の修復の様子を見ることができるのは事前に知っていたが、実際に行ってみると現場で使用する道具などが展示されていてわかりやすかった。文化財建造物修復の展示では、図面を作成するのに使用される面相筆や墨が置かれていた。また、板材を作るのに使う鋸や鉋など手動の道具が展示されていた。コンピューターや機械を用いた作業が話題となることが多いが、伝統的な道具も使われ続けているということが分かった。

発掘調査によって出た出土品修復の展示では、考古学実習で使用した通りの道具が置かれていたが、真弧という土器の形状を写し取るための器具は初めて現物を見た。

土器などの洗浄や補強、接合・復元に用いる道具の展示はたわしやブラシ、竹串や紙やすりなど市販されているものばかりで、土器修復専用の特別な道具が用いられているわけではなかった。

修復工程や使用する材料について調べた。まず、アクリル系樹脂を使用して土器の補強が行われ、遺物に樹脂を塗布したり、樹脂に浸すことで含浸させて固化させるということが分かった(1)。また、破片の接合にはセルロース系接着剤のセメダイン C を使用するのが一般的で、土器を傷つけず簡単に固定・取り外しができる点が特長である(2)ということが分かった。

欠損部分の修復には石膏やセメント系充填剤が使用されるが、近年では樹脂などが使用される場合も多い(3)ということも分かった。

美術工芸品の修復現場では、掛け軸の修復工程や紙の素材などの説明があったため、具体的な点について調べた。

和紙に描かれた書画はそのままでは収縮によって皺やたるみが生じることから、裏打ち紙を貼って補強することが必要となり(4)、掛け軸の場合は一般的に3層もしくは4層の裏打ち紙が使用されることが分かった。

本紙と接する1回目の裏打ち肌裏と呼ばれ、作品を補強して皺などが生じないように安定を図る役割があり、2回目は増裏と呼ばれ作品にしなやかさを与えて厚さを調節し、最後の総裏で各部材を一体化させているということが分かり、掛け軸を美しく保つための工夫を感じた。

肌裏は美濃紙、増裏は美栖紙、総裏は宇陀紙を使用すると定まっており(5)、場所に応じて使用する紙を使い分けていることが分かった。

参考文献

- (1) 三恒商事株式会社-埋蔵文化財部門 土器・石器類の保存 <http://www.sanko-syoji.co.jp/bunkazai/doki.html> (閲覧日:2024年9月26日)
- (2) CEMEDINE ホームページ-Q&A-建築用-その他 <https://faq.cemedine.co.jp/architecture/detail?site=T5WB9K2B&category=67&id=80> (閲覧日:2024年9月26日)
- (3) 埼玉県桶川市ホームページ-市政情報-市の紹介・観光-文化財-国指定重要文化財「埼玉県後谷遺跡出土品」保存修理事業 <https://www.city.okegawa.lg.jp/shisei/shinoshokaikanko/bunkazai/7639.html> (閲覧日:2024年9月26日)
- (4) 額縁のタカハシホームページ https://www.gakubuti.net/user_data/urauti.php?srsId=AfmBOoqXdkhmY-q3agfJEzcZOUvIGqBr8r8pJxMGqThAtT_Njv8BZXoo (閲覧日:2024年9月26日)
- (5) 文化遺産データベース-表具用手漉和紙(美栖紙)制作 <https://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/215539> (閲覧日:2024年9月26日)

「川西市文化財資料館見学レポート」

L221016 齊藤宗一郎

今回私が夏期の見学レポートの題材とするのは兵庫県川西市にある川西市文化財資料館である。当館は平成5年(1993年)に開館した。また建物建設の際、建設地から弥生時代の竪穴住居などが検出され、遺構を保存するため基礎を地中に入れたい工法を採用している。この川西市文化財資料館は文化庁の出土文化財管理センターの補助を受け、市内の遺跡から出土した文化財の整理、収蔵を行うとともに、展示室を備えた施設になっている。展示

室は1階のワンフロアのみとなっている。そこでは縄文時代を始まりとする川西市の中世までの遺物を展示している。2階は、資料整理室と遺物の収蔵庫になっている。

今回この川西市文化財資料館を訪れるきっかけとなったのが普段この施設の前を通ることが多いが中に入ったことがなく、このレポートが出題されたため訪れることとした。

現在「川西市政 70 周年&川西市文化財資料館開館 30 周年記念 川西市文化財資料館特別展 2024」として「阪神地域の横穴式石室めぐり」という特別展を行っている(2024年10月14日まで)。この特別展では川西市だけではなく宝塚市や芦屋市、西宮市の古墳も取り上げて出土遺物や各古墳の解説板、写真が展示されている。そして大々的に行っていたのが、「阪神地域の横穴式石室 VR 体験」である(写真1)。

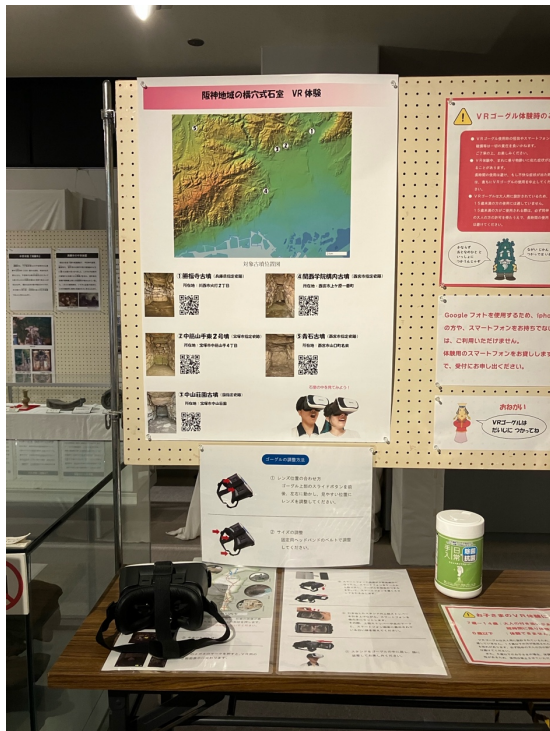


写真1「阪神地域の横穴式石室 VR 体験」(2024年8月22日筆者撮影)

このVR体験では各個人のスマートフォンでQRコードを読み取り、置かれているゴーグルにそのスマートフォンを装着し、石室の中を360度にわたり見ることができるというものである。中を見ることができるといっただけではなく複数の古墳の石室を見ることができるという点が良かったと感じた。また、

今展示に合わせて図録が無料で配布されている。図録には、展示で並べられていた遺物や、展示パネルの内容までもが全て印刷されている冊子である。他にも、川西市で行われた過去の現地説明会の資料や、国史跡にもなっている加茂遺跡や兵庫県指定文化財にもなっている勝福寺古墳のパンフレット、そして資料館オリジナルの解説シートが多く設置されている。また、子どもでも分かりやすいよう、子ども向けの見学のしおりが設置されているため、小学生などでも分かりやすい工夫がされていた。また勾玉の制作体験も行っている。

今回初めて川西市文化財資料館を訪れて、身近にある施設で訪れる機会があまりないところでも一度は訪れてみるべきであると分かった。

参考文献

川西市文化財資料館パンフレット

夏期の見学レポート

L221018 馬場菜摘

文化財実習で、私は元興寺文化財研究所を見学した。元興寺文化財研究所では、大学では見られない実際に文化財の修復現場を見ることができ、非常に有意義な時間であったように思う。ここでは、見学した中でも特に印象に残ったことを記す。

元興寺文化財研究所は、元興寺の発掘調査で発見された約10万点もの資料を解明すること、保存を目的として元興寺に設置された。当初は、調査対象としては仏教民俗資料が主軸だったという。また、元興寺文化財研究所は4つのグループに分かれて文化財を修理、保存している。

私がこの元興寺文化財研究所を訪れた印象としては、前提として文化財を修理する上ではさまざまな技術や知識が必要であるが、この元興寺文化財研究所は文化財修理に試行錯誤し、文化財修理の最先端を歩んできた、という点だ。施設の方のお話を伺っていると、例えば紙の修復の方法は2つ存在するという。1つ目は裏打ちという、言葉の通り紙の裏にもう1枚の紙を貼る方法だ。2つ目は漉嵌という害虫や劣化によってあいた穴に水に分散させた和紙繊維を流し込むことで、和紙繊維を補填するとい

う方法である。2つ方法があるが、それぞれにメリットもあればメリットもあり、どちらが優れた修復方法だ、とは断定できないという。裏打ちは、紙を重ねていくことになるため、本などになると分厚くなりすぎてしまうという。対して、漉嵌は質の悪い墨を使っている資料に対しては使えないという。

このように、文化財修復はその文化財の状態をしっかり確認した上で修理をしなければならず、文化財の修復は非常に緊張感があり、責任を伴う仕事であることを実際の修理現場を見て感じた。しかし、このような仕事だからこそ、やりがいがあると思うし、実際に話を伺った方は、「うちでこの国宝を修理したのです。」というように誇らしげに話をされていた。

私はゼミで文化財の活用について学んでいるが、文化財の活用のためには文化財が良い状態で保存されていることが前提だと思う。そのため、文化財を修理する人たちの貴重さは計り知れず、文化財に科学をもって正面から向き合っている職員の方々には敬意しかない。文化財を実際に修復しているところを見たことがなかったため、非常に良い機会だった。

【参考文献】

・元興寺文化財研究所『総合文化財センター 施設見学の手引き』元興寺文化財研究所、2019

奈良芸術文化村見学感想レポート

L221019 梅津幸太郎

今回の奈良芸術文化村及び、平常展「文化財修理の現場から」からは文化財保存の現場とはどう言ったものなのかをよく学ぶことができた。当施設は文化財修復・展示棟、芸術文化体験棟などによって分けられており、そこでその分野での文化財修復の取り組みや実際の工房が見学できるようになっていた。文化財は有形、無形、及びその中でも仏像や美術工芸品、文献的資料など多くの種類によって分けられており、その区分の違いを自分の目で見ることで体感することができた。一般的には文化財は発掘されたものと、博物館に展示されているものというイメージを持たれやすく、発掘、発見されて

から展示される至るまでの、修復、活用の過程はあまり注目されにくいのではないかと感じていたが、奈良芸術文化村ではむしろその過程を平常展の注目すべきポイントとしており、工房で仏像や美術工芸品の修復を実際に目の当たりにすることで、博物館の展示品に繋がるまでの工程を少なからず学ぶことができた。自分がその中で特に興味を持ったのは、歴史的建造物修復工房での修復工程についてであった。一般的に、文化財の歴史的建造物を見学しようとする場合、修理、修復が行われていない場所を対象とする場合が多く、その建造物の歴史などについて知ることはできても、現在、それらがどのような文化財としての価値を持ち、どのようにそれらが維持されているか、どのような修復が行われているかというのを自分の目で見て学ぶということあまり行われていない。また、歴史的建造物の修復現場は一般公開することが難しく、そう言った機会を設けるということもあまり多くはないだろう。しかし、当施設の歴史的建造物修復工房では、解体された建造物の部材、部品を実際に見ることができ、またそれらの修復を見学することができた。修復というものについて、自分はこれまで単純な部品の修理のようなものだと考えていたが、修復のための解体工事や解体された後の部材の一つ一つの修理、塗装の塗り直しや現場の建造物の調査など、多くの要素を持つ作業なのだとすることを改めて学ぶことができた。また、歴史的建造物の修復の重要な点として、創建当時の部材や、過去の修理で使用された部材を可能な限り使用し、当時の伝統的な工法をできる限り踏襲するという点が挙げられる。日本は地震をはじめとして、建造物の損傷の危険性のある自然災害が多く起こるが、こうした定期的な修復事業というのは、そう言った自然災害などから建造物を守るだけでなく、これまで受け継がれてきた伝統的な技術を次世代に継承していくという意味でも非常に大切であり、その重要性を歴史的建造物修復工房を見学することで多くの人が考えるきっかけになるのではないかと感じた。

夏季見学レポート

L221020 尻池千紗

私は8月7日の見学において、元興寺文化財研究所を訪れた。この施設を実際に見学するにあたって閲覧したホームページや職員の方による事前説明などによって、施設に「元興寺」という名がついているものの、現在では元興寺の関連する文化財に限らず、日本各地からやってくる様々な種類にわたる文化財の調査・研究を行っているという事は認識していた。これに加え、実際に見学を行った中で印象に残った事が2つある。まずは埴輪や木製品を始めとした多種多様な文化財が取り扱われ、各職員の方々によってそれらが同時並行で作業が進められている様子を見学し、災害によって被害を受けた為に運ばれてきたという他県の文化財について職員の方から説明を受けた事である。この施設において行われている数々の仕事は、文化財の経年による劣化や災害が避ける事の出来ないものであるからこそ日々求められているものであり、それらに完全な終わりというものは無いという事を深く理解する事が出来た。次に、大学内の研究室では見た事のないような機材も目にした事である。地中から発見された遺物に脱塩処理を施す為の装置やX線によって内部構造や細かな傷といった事柄を調査するための大型機械、撮影を行う器具とそのための部屋など、講義において視聴した映像や説明の中でしか見た事が無かった上に、大学にも無いような規模の設備を今回の見学によって数多く目にする事ができ、非常に良い経験になったと思った。

以上のように、私は今回の見学で実際に文化財の研究及び保存修復という仕事の様子を目にした事で、今までの学習の中で漠然と知っていた文化財の調査・研究・修復の作業やその必要性、作業を進める上で使用する機械類についての知識や考えが深まったと感じた。加えて、今まで持っていた文化財の保存修復という分野に対する興味関心がさらに大きくなったと思う。今回の見学を通して得た考えなどを大切にして、今後の自分自身の研究等に取り組んでいきたい。

<参考文献>

公益財団法人 元興寺文化財研究所 HP

<http://www.gangoji.or.jp/kenkyusho/jap/mokujitopics/mokujitopics.html> (最終閲覧日 8月4日)

元興寺文化財研究所を見学して

L221021 藤原菜穂子

私は、8月7日の元興寺文化財研究所の見学に参加した。元興寺文化財研究所は元興寺の解体修理と防災工事に伴う発掘調査で発見された仏教民俗資料調査と埋蔵文化財の保存処理を目的として設置されたのが始まりである。現在では、金属製品、木製品などの埋蔵文化財や紙資料、民俗資料などの伝世資料の保存修復や調査を行っている。

この施設では、保存科学グループ、文化財調整修復研究グループ、埋蔵文化財保存研究グループ、文化財企画活用室に分かれて、様々な文化財資料の保存・修復や調査、研究にあたっている。見学に訪れた際にも修復作業が行われており、その様子をガラス越しながら見る事が出来た。実際の様子を見学できる機会は多くないため、非常に貴重な経験となった。

今回の見学で最も印象に残ったのは、伝世品修復室で行われていた輿の修復についての話である。その輿は水害にあったものであり、全体的に黒ずんでいるのが分かった。婚礼の輿であったため、装飾が豪華なはずだが、黒ずんでいてその様子を見る事が出来ないほどであった。

伝世資料、特に民具の保存処理法は代表的なもので5つの工程がある。

1. 燻蒸
2. 処理前の調査
3. クリーニング
4. 脱塩処理
5. 防腐防虫処理

処理前の調査では、写真撮影を行う。これは、作業中の取り扱いで留意すべき脆弱箇所や破損箇所の注意点を記録することを目的としている。また、保存処理では現状維持を基本とするため、処理前の形状から変化がないか確認するための記録でもある。

次のクリーニングでは、資料の表面に付着したほこりや汚れ、金属表面のさびを刷毛やブラシを用いて除去する。ほこりやさびは虫害や腐食の原因となるため、クリーニング処理は保存処理工程のなかで最も重要な工程の一つである。

クリーニングを行ったあと脱塩処理が行われる。脱塩処理とは、液中に資料を浸漬させ、資料内部に含まれる塩分を除去することを目的とした処理である。民具における脱塩処理は、塩素イオンがさびを促進させ、資料の崩壊を引き起こすことを防止するために行われる。資料に含まれる塩分はさびだけでなく、様々な劣化を引き起こす原因となる可能性が高く、脱塩処理は民具の保存処理法では有効な方法であるとされる。

防腐防虫剤を使用した防腐防虫処理も行われているが、薬剤が人体に影響を与えにくいものを使用しているものの手に触れる機会が少ないわけではないため、使用せずに済む保管環境を整えるべきだとされている。

見学では、伝世資料の他に金属製品や木製品の保存処理法についてもお話を聞かせていただいたが、材質によって保存方法が異なってくるのがよく分かり、同じ材質でも状態によって少しずつ異なっていることを知ることが出来た。この見学を終えて、文化財資料の保存修復について今後調べていきたいと思った。

〈参考文献〉

元興寺文化財研究所『公益財団法人元興寺文化財研究所要覧』2021

日高真吾「民具の保存修理について(特集 文化遺産の保存と修復)」『民族藝術』、

民族藝術学会、2003

<http://hdl.handle.net/10502/00008378> (最終閲覧日 2024年9月28日)

夏季見学レポート

L221022 長谷川咲弥

今回、現地実習として奈良県奈良市にある元興寺文化財研究所を訪れた。そこで文化財の調査や修復の現場を実際に見学することができた。土器や金属製品、紙資料、木製品、伝世資料といった項目ごとに調査、修復等の様子を見学し、その中でも特に興味を持ったものについて、新たに得た知見や考えたことなどを述べてい。

日本に残る古文書の劣化原因として、まず高温多湿な気候と害虫が挙げられる。それらによって傷

んだ紙資料は資料に悪い影響を与えないように考えられた材料と繊細な技法を用いて修復が行われる。「漉ばめ法」と呼ばれる修復技法は、虫害によって空いた穴を、糊を使わずに繕うことができるものである。糊は紙をつなぐために必要であると考えていたため、それがなくても修復を行うことができると知って驚いた。そして、和紙の紙すきの原理に基づいた方法であることから、紙資料への負担が少なくなるという点も興味深く感じた。

現場では修復過程だけでなく、分析調査や記録の過程でも多くの最先端技術が使われている。三次元計測によるデジタルデータ作成や、X線での分析などがある。また多くの文化財の分析にX線が使われていることは知っていたが、文化財の内部の構造や材質の分析など、想像より幅広い用途で調査に使われていることが分かった。また分析の過程で、歴史的に重要な文字や文様などの発見があることなどから、文化財保護において重要な位置を占める技術であると思った。

これらの保存修復の工程を知れば知るほど、文化財保護には科学的な視点が重要であることを実感した。科学については、その内容が難しく十分に理解できないこともあったが、どのように現代の技術が活用されているのかを学ぶことができた。

これまで様々な場面で文化財の保存修復の話を聞き、その実態について学んできたが、その様子を実際に見たことはなかった。今回の見学で、文化財がどのように後世へ受け継がれていくのかを知ることができた。また私たちが今見ることのできる文化財には、そのための多くの努力と工夫があったことを、身をもって実感することができた。見学を振り返り、多くの学びを得た今回の見学はとても有意義なものになったと改めて思う。

元興寺文化財研究所を見学して

L221023 寺島涼平

文化財実習において、八月七日に元興寺文化財研究所を訪れ見学させていただいた。この研究所は、元興寺での建造物や美術工芸品の解体修理、収蔵庫建設、防災工事にともなう発掘調査によって、

発見された約十万点の資料の保存し研究することから始まり、現在は、研究、資料保存方法の研究開発とその実用、実践へと活動を拡大している。

私が実際に訪れてみてまず感じたことは、資料の保存修理の様子が見学しやすいになっているということだ。実際に行われている作業の様子が大きなガラスによって中の様子がよくわかるようになっており、また、それぞれの部屋の前に説明書きがあり、中でどのような作業が行われているのか理解しやすい工夫がされていた。このことから、ただ資料の保存修理などをする場所にするのではなく、外部の見学者に活動内容をわかりやすくし、どのような方法で資料を残しているのか理解を深めてもらうということをしていること、文化財を残し伝える仕事の必要性、重要性を広く伝えようとしているということがわかった。文化財資料の保存修理を行っている施設を実際に訪れ、働いている方の話を聞くと、例えば金属製品の保存処理であってもこれまで学んだ保存処理だけではなく、それぞれの金属やその金属製品の状態によって異なった保存処理をするということ、また、書物の保存処理において、作業時間の問題によって、国宝や重要文化財とそれ以外で別の方法を行っているということを知った。これらのことから、それぞれの資料に対して柔軟な対応と資料がどのような素材で構成しているのか、どのような状態であるのか分析し、そのとき出来る最適な方法で保存処理をすることが重要だと改めてわかった。

今回、実際に施設を訪れ、元興寺文化財研究所の活動の一部ではあるがどのような環境、方法で作業が行われているのか自分の目で見ることができ、また、働いている方の話を聞くことができ、文化財研究所の在り方についての理解が深まった。

文化財実習 夏季見学レポート

L221025 辻 成実

私は8月7日に行われた元興寺文化財研究所への見学会に参加しました。研究所内では様々な作業現場を見学させていただき、とても興味深かったです。出土木製品の保存処理の作業現場では、木製品の種類や状態に合わせて使用する薬剤を分け

るなどといった基本的なことから学ぶことができ、紙資料の保存処理では裏打ち等の作業現場を実際に見学でき、貴重な体験ができたなど大変興味深く思いました。出土金属製品の保存処理の作業現場では、脱塩処理をする際に鉄製品は丈夫なため少し粗く削ってもそこまで問題はないということや、銅製品は脆いため鉄と銅で保存処理室そのものを分けているということを初めて知り、そこまでするのかと少し驚きました。また、所内には過去に元興寺文化財研究所が修復や復元に携わった文化財の写真等が展示されており、さまざまな文化財に関わってきたことを改めて知ることができました。また、見学中に所内の方がおっしゃっていた、北野ゼミでもよく言われており、私自身も本当に大切だと思ったことは、保存科学は現状維持が基本ということです。当たり前のことですが、変な塗装や華美な装飾はせず文化財のそのまますを残すということが重要であると話してくださいました。さらに、用いた樹脂や薬品等は取り外しがきくようにするという可逆性についてもお話していただき、やはり重要なことだと改めて感じました。また、次の復元や修復をするときにどこがどう変わったのか、どこをどう処理したのかを記録する必要があるため、元興寺文化財研究所では写真撮影の部屋を用意し、報告書を含む記録の作成に努めているというお話も聞き、文化財にとって、また文化財修復にとって重要なことをたくさん学ぶことができました。

今回の見学会では、さまざまな保存処理や修復の現場を見学することができ、興味深く感じました。そしてやはり自分も文化財修復などの、文化財に直接的に関わる職業に就きたいと改めて感じました。

紙文化財の修復方法と材料

L221026 池田 天

紙で造られた文化財の補修の方法や材料について、元興寺文化財研究所での見学会を通して興味を持った。元興寺文化財研究所で行われている紙の資料に対する修復の方法は本紙に対してその全体を裏から和紙で補強する裏打ちと、細かい紙の繊維を吹き付けて紙漉きの容量で欠損部分を埋め

ていく漉きはめである。他にも欠損箇所をトレースして欠損箇所に合わせた和紙の断片を作り、それを最低限ののりしろで補修していくという方法もある。他の文化財と同様に紙の文化財の修復においても大切なことは現状維持と可逆性、修復の記録であり、修復の方法や使用する材料によって文化財の価値を含め保存し、後世に伝えていく方法を模索していく必要があることが分かった。

紙文化財の修復に用いられている和紙は、楮、三桮、雁皮などの植物の繊維を使って手漉きで作られた、日本の伝統的な紙の総称である。使用する原料や漉き方、添加物、その他加工方法によってさまざまな物性を持つ和紙が出来、その様々な物性の和紙がそれぞれの物性にあった方法で使用されている。文化財の修復に関わるところだと、文書をはじめ典籍、経典などの文字を書くときの料紙として使用されるほかに、絵画作品において本紙として、また、裏打ち紙として文化財の補強材としても使われている。裏打ち紙の中でも本紙や表装裂、表装紙に直接打たれる肌裏紙、2層目、3層目の増裏紙、中裏紙、最後の裏打ちで軸装においては巻き上げた際に本紙に触れることになる総裏紙がありそれぞれ求められる物性の条件が異なり、表面の滑らかさや丈夫さ、厚さなど条件の合う和紙を調達し文化財の修復に使用している。

今回の元興寺の文化財研究所の見学会では実際の作業はあまり見る事が出来なかったが、実際に作業を行っている方の文化財修復の現場の話を聞くことが出来た。また、文化財の修復の現状の成果や課題を再認識し、考えるきっかけとなった。

参考文献

1.大林賢太郎『装演文化財の保存修理 東洋絵画・書跡修理の現在』(選定保存技術保存団体 一般社団法人 国宝修理装演師連盟)株式会社サンエムカラー 2015年3月31日 pp.25 - 41、p61

夏季見学レポート

L221027 西村侑花

元興寺文化財研究所での見学にて、特に興味深かった事項は「金属のクリーニング作業」である。金

属には、鉄・金・銀・銅などといった複数の種類があるが、私はこれらの種類の異なる金属にも同様のクリーニング作業を施すものと考えていたが、元興寺文化財研究所では、特に金属と銅を明確に区別し、それぞれに部屋を設け、クリーニング作業を行っていることを知った。銅は、金属よりも繊細な作業が求められ、銅のクリーニング作業に他の金属と同じクリーニング道具を用いると、余計に傷をつけてしまうのである。銅と金属の性質の違いを意識するだけではなく、わざわざ別々の部屋でクリーニング作業を行っているという部分に、徹底した修復作業のスタイルを感じた。

続いて、別の日に訪れたなら歴史芸術文化村では、その場所にある4つの建物すべてで、奈良の歴史や文化、芸術を五感で感じることでできる施設となっており、特に一般向けの文化財修復現場の展示を積極的に行っているように感じた。今回も、実際に絵画と仏像の修復現場をガラス越しに見学し、特に印象に残っているのは絵画の修復現場の様子である。絵画・書籍等修復工房は、奈良県で唯一「国宝修理装演師連盟」に加盟する工房で、国宝や重要文化財の修理を行っている。まず、そのような現場を無料で一般向けに公開していることに驚いたと同時に、文化財修復のリアルな現場を知るととても良いきっかけになるだろうと考えた。なら歴史芸術文化村は、修復技術者の後継者不足の解消につながる画期的な施設だと感じた。

最後に、これらの施設で共通して掲げられていたのが、「劣化した文化財を完全に元のかたちに戻すのではなく、必要最小限の処置を施し、再び使用できる安全な状態で戻す」という目標である。この「必要最小限」という言葉には、彩色の塗り直しをできるだけ行わない「現状維持」の工程と、後世によりスムーズな修復を行うために部品の取り外しを可能にする「可逆性」の工程が含まれている。また、修復に現代の技術によって生まれた科学的な素材ばかりを使うのではなく、できるだけ古くから使われてきた伝統的な素材を使うようにしていることも共通していた。このように、文化財修復は共通の目標と認識の上で成り立っているのだと改めて感じた。

なら歴史芸術文化村見学レポート

L221028 高垣柚香

2024年8月22日燦々と照りつける太陽の下、近鉄天理駅に降り立ちバスでなら歴史芸術文化村に向かった。かねてより行きたいと思っていた場所であったが、駅からの遠さ故行く決心がつかず今回訪れることができたことを大変嬉しく思う。私は事前情報として数年前から一貫して、文化遺産に関する建物が誕生したという情報しか持ち合わせておらず、天理にあるということは古墳関係だろうと思い込んでいた。実際は想定と全く異なり、最先端な修復技術から伝世資料の保存まで素人の私たちに寄り添った貴重な展示を行う施設であった。今回はなら歴史芸術文化村で学んだ感想をまとめていく。

なら歴史芸術文化村に着いた後まずは芸術文化体験棟に向かった。今回体験することはできなかったが、奈良の伝統文化・地域資源の活用などの観点に寄り添ったアートを体験することができる建物となっているため今後訪れる機会があれば体験することに決めた。

せんとかん、天理市の街の風景、幾何学的模様の塗り絵ペーパーが設置されたキッズスペースの前の講義室にて杉山洋先生から講義を受けた。施設の概要、これから向かう文化財修復・展示棟について、など説明を受け、その後全員で文化財修復・展示棟へと向かった。事例に基づく多くの文化財修復の本と簡易的な体験型組物、そして一際目を引く薬師寺東塔の模型に出迎えられた。薬師寺東塔の模型前に体験型の斗栱や垂木が置かれていて試してみたが、このようなもので屋根を支えきれのかと疑念を生んだだけであった。しかし目の前の東塔の模型はもちろん、私が訪れたことのある寺社仏閣では大抵似たような屋根構造を見たがどれも地にどっしりと建っていたためこの疑念は自身の知見により解消されることとなった。

東塔模型から振り返るとすぐ歴史的建造物・考古遺物修復工房を見ることができた。考古学準備室で見たことがある、と半ばはしゃぎながらパソコンで実測図を書いているだろう様子と洗濯ばさみで挟まれた復元途中の埴輪を見ることができた。復元は

ともかく実測図を書く様子は考古学準備室で幾度となく見ており、改めて私たちは大学で貴重な経験をしていると感じた。次に地下に向かい絵画、書跡等・仏像等彫刻修復工房に向かった。広い修復作業場の中央で文化財と向き合っている作業者の姿は美しく見ることができてとても嬉しく思った。絵画・書跡等修復工房の右側に大量の絵の具があり見ているだけで心が踊った。仏像等彫刻修復工房では仏像に対して座って向き合っている様子は可愛らしくも敬意が感じられ、見学している私の心までも畏まる気持ちになった。そして最後に企画展示室へと向かった。そこでは今まで見てきた文化財修復用の道具、体験型遺物修復、鉋で削った木を触り比べるコーナーなどがあった。見たことがあるものから、普段の生活でも見ることのある道具、何にどこに使うのか皆目見当のつかない道具まで多く展示されていた。淡々と紹介するスタイルのため、全体的にとっても分かりやすく、かつ親しみやすい展示で楽しむことができた。

日本で初となる文化財4部門の修復工房を通年で開放しているという珍しい展示を見ることができ良い経験となった。また一重に文化財を修復するといっても、様々な向き合い方、道具があることを学ぶことができた。1つ思うことがあるとすれば通年で作業風景を公開している様子は、作業者はいずれ慣れるかもしれないが、ストレスをより多く感じる職場なのかもしれないと感じた。そのような中、作業風景を一部見せてくださったことに感謝申し上げたい。

静岡市立登呂博物館

L221030 大田悠月

一階には「弥生体験室」として登呂遺跡の住居や高床倉庫、祭殿が縮小再現されている。実際に住居内に入ることができる。壁一面に登呂の山々が映し出されているため、弥生時代の登呂にタイムスリップしたような感覚を味わうことができる。他の体験として、疑似水田での田植え体験、田下駄体験がある。田んぼの足場の悪さが再現されており田植えや田下駄を履きながらの農作業の難しさを感じることができる。土で汚れる心配をすることなく体験できる

点が魅力となっている。実際に体験してみると田下駄を履くと不安定な足場で作業することが非常に難しく、弥生時代の人々は本当にこのような道具を使って毎日農耕していたのかと不思議に思った。火起こしに使われていた舞錐を触ることができ、弥生時代の火起こしを体験することができる。さらに屋外では実際に炎を出すまでを体験できる。火起こしは常設だが、季節ごとに田植えや稲刈りなど様々な体験が可能で、敷地内に復元された高床倉庫や住居も相まって当時の暮らしを追体験しているように感じることができる。



写真1. 復元住居

二階の常設展示室では、「登呂ムラと稲作」と「登呂遺跡の歴史」を主題とした出土品の展示されている。出土品の大多数は弥生時代の人々が実際に使っていたものである。模型や音声解説、解説映像を通して弥生時代のムラの在り方と人々の暮らしの様子が分かるようになっている。展示室中央には登呂ムラの全体像を再現したジオラマがあり、併設された情報端末でより詳しくムラの実情を理解できるようになっている。また、登呂遺跡発掘当初の新聞や発掘した人へのインタビュー映像が展示されており、登呂遺跡発掘に対しての日本人の思いが見えてくる。第二次世界大戦に敗戦した直後ということもあり、当時の日本人は発掘によって自身のルーツを再確認し、そこに復興への希望や期待を見出したようであった。

以上のように、豊富な出土品等の資料が分かりやすく展示されているだけでなく、実際に弥生時代の暮らしを体験することで弥生時代への理解を深め、考古学や歴史学に興味を持つきっかけになる展示内容になっていた。



写真2. 登呂博物館チラシ

徳川美術館について

L221031 箭野颯真

徳川美術館は財団法人徳川黎明会によって運営されている私立の美術館です。現在の徳川美術館と徳川園とは、尾張徳川家二代光友が隠居所として設け、元禄8年(1695)から同13年にこの地で亡くなるまで過ごした大曾根御屋敷の中心部に当たります。徳川美術館には、第9展示室まであり、それぞれ違ったテーマが設定されていました。刀や鎧、陶器など様々な展示があります。また、時期によって違う展覧会などもあります。

第1展示室のテーマは、「武家のシンボルー武具・刀剣ー」でした。大名はいうまでもなく武士であり、その集団の長であったから、泰平の世の江戸時代にあっても、常に軍備を怠ってはいけませんでした。大名家の武器武具は、単なる戦闘実用品ではなく、同時に「武士の心根」を表すように、美しく気品に満ちていることが必要でした。中でも刀剣は「武士の魂」といわれる通り、武士の精神の象徴として大切にされ、最も高い格式を持ち、公式の贈答品の筆頭ともされました。大名の甲冑は、一軍の大將の着用品です。武威と気品に満ち、贅を尽くし技術の粋を集めて、はた目にも美しく見えるように作られました。

第2展示室のテーマは「大名の数奇ー茶の湯ー」でした。桃山時代に武將の間でも流行した「詫び茶の湯」は、江戸時代には「御数寄屋」の接待として、公式行事の一部に組み入れられました。こうして固定された茶の湯は、「詫び茶の湯」の持っていた、その時々々に美や新たな価値観をうち立てていく自由な

想像の精神を失って武家故実となり、格式行事と化しました。大名は邸に茶室を設け、将軍の「御成」をはじめ、晴の行事に備えました。茶の湯道具もまた格式道具となりました。桃山時代に武将や上層町衆や数寄者が持っていた道具の大半は、江戸時代には将軍や大名の秘蔵品となり、「名物」の道具は、時に一国一城にもあたるとされ、その所持、非所持が家の格を表すとまで評されました。

第3展示室のテーマは「大名の室礼―書院飾り―」でした。大名の公式行事は、表御殿の「書院」あるいは「広間」で行われました。御殿の各部屋に設けられた飾りつけ専用の空間である床の間・違棚・書院床には、武家の故実にして各種の道具が飾られました。殿中の飾りつけや典礼を「室礼」といい、江戸幕府はその手本を室町幕府の故実にもとめたので、足利將軍家が秘蔵していた「東山御物」を第一に、唐物と呼ばれる中国製の品々を中心とした飾りつけ法が規式とされました。多くの書画や工芸品の産地が中国であっても、それらを飾り道具に採りあげ、とりどりに組み合わせ、調和の美を創り出したのは室町の武家社会であり、その美意識や価値観は、そのまま江戸時代の大名家に伝えられました。

第4展示室のテーマは「武家の式楽―能―」でした。足利將軍家は、猿楽＝能を庇護し、高度に洗練された舞台芸能に育て上げました。大名たちにも大いにもてはやされ、公式行事に演能は欠かせないものとなりました。江戸幕府もこの伝統を承け、舞楽が公家の式楽であったのに対して、能を武家の式楽と決めました。御殿の広間の前庭には能舞台が設けられており、慶事や公式行事の際には必ず能が演じられ、それを見ながら宴は進められました。そのため大名家には能役者が召抱えられ、各種の曲目に応じられるように、いろいろな装束・能狂言面・小道具が備えられていました。正月二日には幕府で「謡初め」が行われ、大名家でも年中行事とされました。大名自身も謡い、時には自ら舞うことも必須の教養とされていました。

第5展示室のテーマは「大名の雅び―奥道具―」でした。大名自身やその夫人・子供たちの私的な生活の場「奥」で、身の回りを飾ったり、使用した道具、また教養を高めたり、趣味や遊びに用いた道具を

奥道具といいます。大名の華やかな生活をしのばせる豪華な蒔絵の調度品は、婚礼の際の入奥道具に多いです。その種類は、香道具・化粧道具・文房具・飲食器・旅道中具・遊戯具・楽器など多岐にわたっています。王朝文化の伝統をひく貝合せや聞香は、単なる遊びではなく、武家の婦人に欠かせない教養でした。楽器の演奏も、たしなみの一つです。昔から宝物視されていた古筆や古画はもとより、江戸時代の作品、ことに親しみやすい画風の狩野派・土佐派、それに浮世絵なども愛好されていました。

第6展示室のテーマは「王朝の華―源氏物語絵巻―」でした。源氏物語絵巻は日本美術を代表する最も有名な絵巻物です。十一世紀初頭に紫式部が著した源氏物語五十四帖よりそれぞれ場面を選んで絵画化し、美しい料紙に本文の一部を書写して、交互につないでいます。現存の絵巻の中では最古の作品で、十二世紀前半に宮廷貴族たちによって作られたと考えられ、王朝時代の雅びな様子を余すところなく伝えています。画風はやまと絵の中でも女絵と呼ばれる優雅で静態的な表現です。江戸時代には阿波徳島の蜂須賀家に一巻と尾張徳川家に三巻が伝えられました。すべて国宝に指定されており、原本の展示は極めて短期間に制限されているので、複製・映像を中心に展示しています。

第7・8・9展示室は企画展示室となっており、昭和十年開館当時の展示室です。外観はほぼ当時の姿のままに残し、昭和62年(1987)に内部を改装しました。第8、第9の小展示室につながった一つの大展示室の形式です。当初は自然光照明が主体でしたが、改装によって人工照明に切りかえました。しかし自然光の優れた点も捨てがたく、一部に活かせるように残してあります。玄関の腰壁の黒大理石に色タイル象嵌で現わされた葦手絵、展示室の高い天井や寄せ木の床が、徳川美術館の歴史を物語り、日本近代建築史上の重要建造物として位置づけられています。ここには、大鎧や腹巻、胴丸などの鎧類・埴輪・などが展示されていました。最後には長久手合戦図屏風があり、その大きさも綺麗さもとても圧巻でした。

「元興寺文化財研究所見学」
L221032 上村祥太

今回の見学で訪れた元興寺文化財研究所は奈良県奈良市にあり、研究所の仕事は「調査・分析」「保存修理」「活用」の三つの要素からなる。今回見学では主に「保存修理」の仕事内容を学んだ、研究所では木製品から金属製品まで様々な素材の製品の調査、分析、保存修理をしている。木製品、金属製品などで研究室が分けられており、それぞれの研究室の前の壁には「保存修理」をどのように行っているかの説明が掲載されておりとても参考になった。木製品、紙製品、金属製品それぞれが調査、保存処理方法が確立されてあった、また木製品の中でも保存処理方法として様々な方法があり、木製品の特徴に合わせた処置を行っているのは、そこまで細かく決まっているのだと驚いた。

発掘の後の保存処理前の作業からさび取りや脱塩処理、その後に行う修復作業など多くの工程があり、特に処理前の調査では X 線写真など機械を使った作業が行われていた。しかし、今回は人の手による作業がよく目について印象に残った。研究室の中で作業している人の手元が見えたがとても繊細な動きが必要で、想像よりも機械による作業ではなく人の手による作業が多いのだと分かり驚いた。

授業で文化財の保存修復について学んでおり、調査分析として X 線検査や色彩検査、材質の検査などに使用する機材も見て、授業の一環で一部触ったことがあるが実際に研究所でどのように使用しているかの一例を見ることができて良かった。また、授業で紙や映像等の資料で文化財の「調査・分析」「保存修理」を見るが、実際にその作業に関わる人や物を見るとさらに理解が深まりとても良い経験になった。

「活用」の面として研究所で調査・分析から保存修理まで行った文化財を各展覧会等で展示する以外にも 3D プリンターを用いた文化財のレプリカの制作など最新の技術を使った以前にはできなかったようなことができるようになっておりこれからどのように発展していくのか興味深い。

元興寺文化財研究所総合文化財センター見学会
L221033 西川大陸

元興寺文化財研究所は、元興寺極楽堂や禅室などの解体修理によって発見または、出土した史料を調査、研究するとともに後世に伝え続けるために保存修復もする機関として誕生した。現在は、元興寺関連の遺物のみを扱っているのではなく、奈良県内の他の寺社や近畿圏にある寺社、四国にある寺社など全国範囲で活動している。また、遺物の保存修復の他に、寺社の悉皆調査や美術史をもとにした調査、考古学による調査など保存科学以外を用いた調査なども行われている。

見学した際には、令和2年(2020)に熊本県で起こった豪雨で被災した駕籠が修理されていた。女性が乗る駕籠(入嫁する際に乗る駕籠)は、外側と内側に彩色が施され、家紋があしらわれていた。扉とカーテンで仕切られた場所に置かれ、外気やほこりなどが触れないように細心の注意が払われ、修理が行われていた。男性が乗る駕籠(主に城主の駕籠)は、女性の駕籠に比べ、漆で覆われたのみで質素であるが、前面部分に取り付けられた障子によって直接的に城主の顔を見ることができないようになっており、実務的な面が強い駕籠になっていた。しかし、水に触れたことが原因で、漆が剥げ、木が曲がってしまい、痛々しい状態だった。応急処置として工具を使い、木の曲がりを抑えていた。

博物館には、組み立てられた土器が展示されている。これらは、散逸した土器を石膏でつなぎ合わせ、元の姿に復元されている。しかし、展示による劣化や研究によって判明した石膏による破壊などで土器に悪影響を及ぼすため、土器を預かり再度、つなぎわせるという活動もしている。見学した際には、土器に付着した細部の石膏を取るために電動やすりできれいに削っていたり、大型の家型埴輪を修理していたりした。

駕籠や土器を修復する部屋の他に鉛の壁で覆われた X スキャンの部屋や塩分を含んだモノから塩を抜く脱塩処理する部屋、樹脂を注射器で、浸透させるのではなく、直接的にモノを樹脂に浸し、樹脂を浸透させる部屋など様々な部屋があった。元興寺文

化財研究所は、元興寺に限らず、全国の文化財、文化遺産を守り伝えるため、日々、保存修復するとともに調査し、それを展示や見学ツアーを行うことによって広く情報を提供していることがわかった。

参考文献

- ・元興寺文化財研究所『公益財団法人 元興寺文化財研究所要覧』元興寺文化財研究所 2021 年
- ・元興寺文化財研究所『元興寺文化財研究所総合文化財センター 施設見学の手引き』元興寺文化財研究所 2019 年

元興寺文化財研究所を見学して

L221035 矢田有沙

私は今回、元興寺文化財研究所を訪れ、様々な資料の修復方法や設備などを見学させていただいた。

まず、紙の修復には裏打ちとすきばめと呼ばれる二つの修復方法があることを知った。すきばめは水の中に細かい和紙の繊維を入れることで修復するため、水に浸すと流れてしまうような炭を使った文化財には適していない。反対に、裏打ちは水で炭が流れることはないが全体的に分厚くなってしまうというように、異なる特徴を有することを知った。このことから私は、二つの修復方法にはそれぞれメリット・デメリットがあるため、その都度適した方法を選択する必要がある、その見極めを要求される修復師の負担はやはり文化財にとって大きいと改めて感じた。また、土製品・土器製品の修復においても、破片の無い部分は類例を見ることで、その場所にはついていた文様を予想し復元しなければならず、その判断は修復師の裁量に委ねられる。また、修復の際に使用する樹脂は、強度はそこそこあるが文様を入れる前に固まってしまう樹脂と、強度はそこまでないが固まるのが遅く文様を入れる時間を設けられる樹脂の二つがあり、先程の紙の修復と同様に 2 つの樹脂を使い分けていると知った。このことから、全てを兼ね備えた修復方法は存在しなくても、できるだけそれぞれの資料に適した方法を選択・模索し続けることがより高度な修復を目指す上で必要不可欠であると私は考える。

また、X 線に関してサビをとる範囲の判断や漆碗などの木製品の補強すべき場所の特定など、その汎

用性の高さに驚いた。また、CT の大きさも様々でものによっては扱う CT も違うことを知り驚いた。訪れた施設の CT が資料より小さい場合は、他の CT のある場所へ運ぶ必要があると知り、これからより他施設と協力体制を築くことが重要になっていくと感じた。

このことから、私は X 線は人間の手ではなく機械が行うため、感覚や技術、伝統だけでなく科学的に安全で確実な方法をとっているため、それぞれのものに適した処理の大きな助けとなる X 線と文化財は現在、切っても切り離せない関係であると改めて感じた。

今回の見学を受けて、文化財研究所が実際にどのようなことを行っているのかを直接見るのができ、文化財の未来について考えさせられる実りある経験をする事ができた。

夏季見学レポート

L221036 鈴木さくら

夏季見学では元興寺文化財研究所に行った。見学の際に実際に見ることのできた彩色資料の保存修復について関心を持った為、事後調査を踏まえ述べていく。

元興寺文化財研究所要覧によると伝世資料とは、生産や生活に使われてきた道具類、仏像や神像などの信仰の対象になっている資料、工芸品や金工品を含めた伝世してきた文化財であると示されている。また、伝世資料の保存修復の特徴として小さな釣針や乗物、重量の梵鐘、全身 10m 以上の漁船など多種多様な保存修復対象があることも挙げられている。研究所ではランドセルを保存修復している実績があり、自分自身も過去に使用していたものが伝世資料として保存修復の対象になっている事がとても印象に残った。

彩色資料は顔料や漆などによって彩色されている為修復の際は膠の劣化や地板の伸縮、金属部分の錆による膨張によって彩色部分が剥落する恐れから剥落止めが重要となる。こうした彩色資料の修復方法として膠水水溶液やアクリル樹脂の噴霧や注射器や筆によって注入・塗布を行って彩色部分を

接着し剥落止めを行う。また、彩色資料では粉状に剥落するものと層状に剥落するものの2種類に分けられ、資料の劣化状態に合わせて接着剤の種類や濃度を変更している。

伝世資料の保存修復の課題としては、最近まで実用されていたことから資料本体が丈夫であると考えられて野晒しになっていたりする資料が多く、放置されている間に崩壊したりと修復不可な状態まで劣化が進行してしまうことが少なくないといった点にある。更に、見学した際に職員の方が文化遺産の現状維持の為に既に剥落してしまった箇所に加筆や補彩を行わないことを前提に保存修復をしていると仰っていた事もあり伝世資料本来の彩色や文化的生活の様子を鮮明に残していくことが困難であることも分かった。その為、定期的に資料の点検や保存環境の整備などを意識的に行うことが重要であることがいえる。

今回の元興寺文化財研究所での見学では伝世資料だけではなく金属製品や木製品などの様々な文化遺産の保存修復についての研究所としての留意事項や方針を学ぶことができ、技術だけでなく考え方も今後の研究に取り入れていきたいと考えた。

<参考文献>

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jwpa/40/3/40_100/_pdf/-char/ja

雨森久晃・桃井宏,2014,「木材保存」,『木質文化財の保存と修復(1)伝世資料』,40(3):p.100-104(最終アクセス9/13)
公益財団法人 元興寺文化財研究所,2021,「公益財団法人元興寺文化財研究所要覧」『伝世資料の保存修復』:p.24-25

元興寺文化財研究所見学レポート

L221037 高尾悠介

元興寺文化財研究所を見学して、当研究所は名前のとおり元興寺境内で出土した考古資料だけでなく、寺社や博物館などに伝わった伝世資料も修理・修復していることを知り、幅広い分野で活動していることが分かった。文化財の研究施設を見学するのは今回が初めてで、何を行う場所なのかよく分かっていなかったため、多くの学びがあった。

見学で学んだこと

元興寺文化財研究所は、保存科学研究グループ、埋蔵文化財研究グループ、文化財調査修復研究グループ、文化財企画活用室の各室に分かれており、文化財に関する様々な調査・研究に携わっている。文化財の研究所には「ひたすら研究所にこもって調査・研究をしている」というステレオタイプなイメージをもっていたため、それぞれの研究分野のグループの他に文化財企画活用室というグループが存在していたことは新たな知見であった。各グループの職員の方々に研究所を案内していただいた際に、文化財の価値を共有することの大切さを感じた。当研究所では、国宝や重要文化財の他、個人や寺社仏閣が所有されているものも調査・修復している。文化財として指定されているかいないかで、かけられる調査・修復費用の違いはあるわけだが、そういった格付けのようなものにあまり縛られずにやっていくということを大切にしている。調査・修復をお願いする方が大事にしているものであれば、それはすべて文化財だということである。多岐に渡る文化財の調査研究・保存修復を行っている研究所がこのことに重視していることは、文化財を守り、かつ多くの人に親しんでもらう点で重要な役割を担っているのだと感じた。文化財の調査研究・保存修復に携わり、展覧会や講演、見学などを通じてその価値を常に発信している元興寺文化財研究所は調査研究・保存修復に関する総合的な研究所だといえる。

現地実習で興味のある事項

金属製の遺物の保存処理について、興味をもった。金属製の遺物の保存処理には、脱塩処理と樹脂による含浸強化処理が行われる。脱塩処理とは塩化物イオンや硫酸イオンなどの劣化要因をセスキ炭酸ナトリウム水溶液に溶出させ除去する処理のことといい、錆の進行を一時的に抑えることができる。この後に行うのが、アクリル系樹脂による含浸強化処理である。樹脂のコーティングにより、いっそう錆びにくくなる。また、接合や補填には、エポキシ樹脂やシアノアクリエート系接着剤が用いられている。これらの工程を施すことにより、劣化を防ぐとともに、外的要因からも守ることができる。

今回の見学を通して、文化財の調査や保存修復方法について詳しく学ぶことができた。その中で、金属製の遺物の保存処理について、興味をもった。実際に調べてみると、錆から遺物を守るために様々な工夫をしていることがわかった。金属製品について錆の進行を抑えることにより、これらを未来に残していくことを目的とする研究員の強い思いを感じる事ができた。

(参考文献)

元興寺文化財研究所 HP「金属研究室」

www.gangouji.or.jp/kenkyusho/jap/kinzoku/kinzoku.htm (2024 年 7 月 21 日閲覧)

川本耕三「文化財の保存科学処理」『日本接着学会誌』第 45 号、2009 年、184-189 頁。

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター「金属製品の保存処理 考古遺跡の分析学的研究」『なにわ・大阪文化遺産学叢書』第 12 号、2009 年、23-26 頁。

東北芸術工科大学「修復を望むほど大事にされているものは、全て文化財 / 元興寺文化財研究所・卒業生金澤馨」
<https://www.tuad.ac.jp/gg/interview/7892/> (2024 年 7 月 21 日閲覧)

元興寺文化財研究所見学について

L221038 坂元美天

8 月 5 日に元興寺文化財研究所の見学に行きました。研究所内には、様々な機械が設置されていました。元興寺文化財研究所に訪れるまでは、発表の準備のために論文や参考資料などで得た知識のみでした。実際に訪れて実物を見てみると、想像していたものと違うものもありました。見学で印象に残っているものは、いくつかあります。1 つ目は、X 線装置です。X 線装置は文化財の分析を行う際にとても重要な役割を担っています。文化財の修復についての資料や授業内の映像で何度か見たことはありましたが、実際の機械の大きさは想像していたものよりも大きくて驚きました。X 線装置の大きさが大きいほど、分析できる文化財の種類が広がるのではないかと思います。大きな文化財を分析する際は、文化財の移動が大変そうだと感じました。次に気になったことは、空調についてです。文化財は温湿度の調整がとても重要なので、研究所の内部の環境に注意する必要があります。研究所では天井に大き

なパイプのようなものがついており、文化財に適した環境になるように工夫されているということが分かりました。次に気になったのは、籠です。今回の見学で初めて籠を実際に見ることができました。昔の物語や時代劇などで目にすることはありましたが、実物を見て人が実際に入る様子をより鮮明に想像することができました。想像していたものよりも内部にゆとりがあると感じました。最後に気になったことは、写真スタジオがあることです。文化財を撮影する場所があることを初めて知りました。文化財の撮影をすることによって修復前と修復後の記録を行うことができるので、研究所内に撮影をするスペースがあることは便利だと感じました。また、文化財をよりきれいに撮ることができると感じました。

今回、元興寺文化財研究所での見学を経て、文化財の実際の研究の様子や修復の様子を知ることができました。文化財の修復の裏側を見ることはなかなかできないことなので、とても貴重な体験をすることができました。

文化財実習 見学レポート

L221039 河村萌花

今回、元興寺文化財研究所総合文化財センターに見学に行ってきた。この施設は、平成 28 年 11 月に開所した。昭和 36 年元興寺内に、仏教民俗資料調査室を立ち上げ、平成 29 年に 50 年を迎えるため作られた施設である。館内の一階は樹脂含浸や脱塩を行う金属器保存処理室、土器修復室、X 線撮影室、伝世品修復室、写場、考古整理室、資料保管庫、木器保存処理室、二階は記録資料修復室、金属器保存処理室、人文考古学研究室となっている。

保存処理を行う前に顕微鏡や蛍光 X 線分析装置などで調査し、その素材に合わせた保存処理を施す。木材などは、発掘された際に水分を多く含んでおり、そのまま放置してしまうと水分が抜けて形状が変わってしまう。そのため、木材に含まれる水分に置き換わる薬剤を浸し、形状を保たせている。薬剤にも種類があり、メリットデメリットがあるため、吟味しその素材に合うように選ぶそうだ。

紙資料では、裏打ちか漉嵌法で修復を行う。前者は紙の裏に薄い和紙を張り、補填する方法である。水を使わないので、顔料や染色されて色落ちしてしまうものでも修復することができる。しかし、裏から紙を張り付けているので、冊子など厚みがあるものには向かない。漉嵌法では、裏側から細かくして水に溶け込ませた和紙の繊維を流し込み、本紙の虫穴や周囲に和紙の繊維を嵌め込める。これに圧力をかけながら自然乾燥すると、本紙の和紙繊維と流し込んだ和紙繊維が水素結合して、糊を使わずに虫穴を繕うことができる。この漉嵌法だと元の紙と厚みが変わらないため、厚みのある冊子に向いている。だが、水を使うため、染色が施されているものは色落ちしてしまうため、この方法では修復が行えない。

文化財研究所内には写真室もあり、スタジオのようだった。ここでは、保存処理をする前とした後に写真を撮り、形状や状態がどのように変化したのか、していないのかを比較するようである。他にも、土器修復室では割れた土器を、どのように元の形状に直すのか学ばせていただいた。文化財の修復に関して、知識として理解はしていたが、見学を通して、より詳しく知ることができたと思う。

参考文献

『総合文化財センター 施設見学の手引き』、公益財団法人元興寺文化財研究所、2019年

元興寺文化財研究所見学レポート

L221040 大下未結

元興寺は飛鳥時代に蘇我馬子が発願し、推古天皇勅願、聖徳太子創建の官大寺として建てられた法興寺（飛鳥寺）を前身とし、都が平城京へと遷都した際に奈良の地へ移されたものである。元興寺文化財研究所は、昭和18年から36年までおこなわれた元興寺極楽堂・禅室などの解体修理とその防災工事に伴う発掘調査で発見された約10万点にもおよぶ中世庶民信仰の性格解明と保存を目的として、元興寺に設置された中世庶民信仰資料調査室を始まりとしている。

研究所内の伝世資料修復室では修復作業中であつた江戸期の駕籠や仏像を拝見した。伝世資料とは人々の手で伝えられてきたもののことをいい、長期間使用されてきたがために破損していることも多く、時代の範囲も広いため、昭和初期の民具なども取り扱うという。修復の特徴としては「ないところを復元する」という点が挙げられる。仏像であれば欠損した手の意味を変えないための修復をおこなっているという。

金属器保存処理室では脱塩処理・樹脂含浸作業がおこなわれていた。脱塩処理作業は、鉄製品であれば薬剤に漬けて内部にある塩分を除去する処理を、銅製品は薬剤に漬けて安定させる作業をおこない、樹脂含浸作業では遺物の強化と酸素・水分の遮断を目的として遺物へアクリル樹脂を真空でしみこませたあと、アクリル樹脂を遺物に塗布するという。

土器の保存修理では、出土遺跡の評価が定まる以前に接合された土器の石膏を解体して、再度組み立てる作業がおこなわれていた。はじめに接合されてから時間がたつと強度に問題が発生する可能性があるため必要な作業だが、破片から一つの土器を接合するのは骨が折れる作業だろうと思う。土器の失われた部分はエポキシ樹脂などで復元されるが、その際に元の土器とまったく同じ風合いにするのではなく、色のトーンを落とすなどして本物と復元部分の差異が明確になるように考慮されていた。

風俗博物館の感想

L221041 廣橋真於

8月の見学会において、私はどちらの見学会にも参加できなかったのですが、地元ではないが、初めて訪れた風俗博物館について記載します。

私が見学した展覧会の名称は「源氏物語 六條院の生活」である。展示の概要は『源氏物語』の様々なシーンを四分の一の縮尺で具現展示してある。加えて、平安時代の服飾の流れを比較できる展示や『竹取物語』に関する具現展示も行われている。『源氏物語』『竹取物語』を含め、平安時代の様々

な性格の場面を立体的に表現し、平安時代を感じる事が出来る。

私が風俗博物館において、もっとも気に入った展示は『十二単』の展示だ。概要は等身大の女性の人形に本物の十二単が着せられているものだった。自分自身、中学や高校の日本史の授業において、十二単というものがあるという事を知っている程度で、本物の十二単を見たことが無かった。本物の十二単を見てみると思っていた以上に分厚く、平安期の貴族の女性はこのような分厚く動きにくそうな服装をしていたのかと驚いた。また、単衣の内に着ているものまで、合わせると平安中期の女性は20枚以上着用していたことも展示の説明版に記載されており、とても驚いた。また、十二単にまつわる様々な制度やしきたり、四季によって単衣の色を変えていたことなど、今まで何も知らなかったことを知ることが出来た。これらの点から十二単の展示が一番気に入った。



写真. 模型展示風景

また、風俗博物館には、平安時代貴族の生活や儀式についての展示が多く存在していた。説明板があるのみではなく、四分の一の縮尺の具現化模型が数多く存在し、平安時代貴族の生活や、『源氏物語』や『竹取物語』の様々なシーンを四分の一の縮尺で具現展示してある。四分の一の具現化模型ということもあり、スケールは壮大であり、訪れた人々の目を引いていた。平安時代貴族の生活や『源氏物語』や『竹取物語』について視覚でとらえやすく、面白い展示が数多くあり、興味をひかれた展示であった。

奈良歴史芸術文化村の見学記録

L221042 永立明利

8月22日に行われた現地実習会では、奈良県天理市にある「なら歴史芸術文化村」を訪れ、文化財の保存や修復に携わる現場を体感した。文化遺産学専攻である私にとっては大変貴重な経験であり、また良い学びの機会であった。

最初に、歴史的建造物修復工房、考古遺物修復工房、絵画・書跡等修復工房、仏像等修復工房の4つの工房を見学した。すべての工房において共通して印象的だったのは、ガラス越しではあるものの、職員の方が実際に作業している様子を見ることができるといった点だった。私はこれまで、文化財を修復する現場には立ち会ったことがなく、そうした仕事については「なんとなくこんな感じなのだろう」とやや断片的に想像するだけであった。しかし、実際に自身の目で見たことで、文化財に関わる仕事に対してより具体的なイメージを抱くことができるようになった。また、4つの工房を見学した後は、企画展示室も訪れた。主に建造物、考古物、絵画・書跡、仏像などで区分化されており、それぞれの展示が行われていた。そうした企画展示室の中でも特に印象的だったのは、体験型のコーナーであった。そこでは考古遺物のレプリカの立体パズルを組み立てたり、建造物に使われている木材の種類を触って判別するなど、多種多様な体験ができるようになっていたが、私を含めて多くの見学者が遊んでいた。そして、そこからその体験に関わる文化財への理解をさらに深めることができた。このように、展示されている内容を見て回るだけではなく、実際に自身の五感で感じることで、好奇心が刺激され、より学びの幅が広がるのではないかと考えた。

最後に、今回の現地実習会を通じて感じたこととしては、「なら歴史芸術文化村」が単なる観光施設ではなく、これからの文化財の保存・修復を行っていく上での重要な役割を担っているということである。ここで得た知識や経験は、座学だけでは学ぶことのできないものであり、文化財やそれに携わる仕事をより深く理解するための一歩になった。

岡山城の面白さ

L221043 岡本 渉聖

事前調査

今の岡山城付近には旭川の流域に岡山、石山、天神山という 3 つの丘があった。その石山にあった城を手に入れて本拠地とし、岡山の地を戦国の表舞台に立たせたのは宇喜多直家であった。その子の秀家は、岡山の丘に本丸を定め、今に残る岡山城を築いた(1597 年天守完成という)。江戸時代の文献によると、築城は豊臣秀吉の指導によるものといわれており、多岐にわたる旭川の河道を利用して、流れを現在のように城の北や東を守るように整えたり、堀づくりに活用し、堀の間に南北に長い城下町をつくりあげた。こうして今に続く中心市街地の原型ができ岡山の名が、市名、県名となる礎となった。その後城主となった小早川秀秋、池田氏により城と城下町は、さらに拡張され今に至る。

岡山城の天守は、織田信長の安土城や豊臣秀吉の大坂城がそうであったといわれるように、外壁は黒塗りの下見板で覆われていて、烏城の別名がある。また、発掘によると、宇喜多秀家時代の金箔瓦が出土しており、築城時には、城内の主要な建物の随所に金箔瓦が用いられ、豊臣政権下の有力大名である威厳を示していたことだろう。これにより金鳥城とも呼ばれている。

さらに、天守の石垣や 1 階の平面が不等辺五角形をしているのも特徴の 1 つで、土台になった岡山の丘の地盤にあわせたためといわれている。さらに、西側には付櫓として塩蔵が付属し、天守への入口があった。天守は明治維新後も残る貴重な存在で、昭和初期には詳細な図面が残されましたが、戦災で焼失されたが、昭和 41 年(1966)には、往事の姿を偲ばせる天守が用建された。

事後調査

私が着目した点は2つある。まず 1 つ目は「石垣」である。石垣は場所によって使用される石の大きさが異なっていた。大きな石が用いられている石垣もあれば、小さな石で形成されたものもあった。この石垣の石の大きさは、当時の豊臣政権下の有力大名である威厳や権力を示していることが分かった。特

に、入り口付近の石垣では巨石が使用されており、ものすごく威圧感があるものとなっていた。

2 つ目は、「烏城」と呼ばれる黒い外観だ。城を見た時に何か「渋さ」を感じた。この渋さの原因を追求したところこの黒い外観によるものと分かった。岡山城は外壁が黒漆塗りで覆われているため、「烏城」という愛称がつけられており、この漆黒の外観は他の城と異なる要素の 1 つで非常に独特な存在感を放っていた。調査したところ烏城の由来はカラスであることがわかった。また、当時、黒漆を使った城の外観は非常に斬新で、宇喜多氏の力と権威を象徴する存在でもあった。豊臣政権下で重要な役割を果たした宇喜多秀家のステータスや権力を示すものであり、他の大名とは異なる強烈な個性を表していたとされていることがわかった。

岡山城の見学を通じて、只者ではない強者感を強く感じた。黒漆塗りの外観で知られる「烏城」は、圧倒的な威厳を持ち、他の城とは一線を画していた。その背景には、戦国大名・宇喜多秀家の権威や、彼が仕えた豊臣政権の強大な力によるものだ。特に、岡山城の独特な外観や規模は、豊臣政権下での宇喜多家の影響力と、豊臣家自体の権力の大きさを如実に示しているように感じた。

参考文献

1. 岡山城 <https://okayama-castle.jp/> 閲覧日 9 月 25 日
2. 日本の城探訪岡山城
<https://castlejp.web.fc2.com/04-kinkityugoku/05-okayama/okayama.html> 閲覧日 9 月 25 日
3. 岡山城配布資料

文化財実習夏季レポート

L221044 藤田勇雅

今回、元興寺文化財研究所の研究に行き伝世資料の修復について一番興味を持ちました。事前に知っていた元興寺として木製品の修復についてみたいと思っていましたが、生駒の研究所にまだ残っているということで今回の見学では伝世資料について興味を持ちました。

いただいた資料の中にあった女乗物を実際に見て気になり他の女乗物の文化財を調べてみました。

福岡市博物館には黒田家の女乗物が2艇、村梨子地唐草蒔絵女乗物、黒漆塗松竹梅蒔絵女乗物がありました。村梨子地唐草蒔絵女乗物と元興寺文化財研究所のパンフレットに掲載されている女乗物、この2艇を比べても装飾以外で違いはあまり見えないと思いました。元興寺には他にももう1艇の女乗物がありましたが、いずれにしても形状は似ていました。女乗物はその大きさなどの原因から伝存している数が30艇ほどと少ないのがまず他の文化財との違いだと感じました。他の伝世文化財とは違い大名といった限られた身分でしか所有や製造依頼ができないために希少性が高いと感じました。元興寺文化財研究所にあった女乗物は修復として持ち込まれており、そのうち1艇はほぼ修復済み、うち1艇は修復中でした。元興寺文化財研究所見学时、同じ修復室に別の伝世文化財が存在していました。自分自身が文化財の修復現場についてあまり見学機会がなかったため特に木製品である女乗物の修復がレッカー場のようなところで修復されていたのが意外でした。実際にはもっと温度管理はしっかりされていると思いますし、修復がほぼ終わっていたものに関して言えば、虫よけか何かの防止として幕を表にかけていたのでそのあたりの部屋管理について聞いてみたいと感じました。修復についてその物体やその過程について気になることも多かったですが、それよりも今回の見学ではむしろ現場の環境についての興味ももちました。希少性の高い女乗物はもちろん木製品のための光、湿度についてこれからの研究に活かせたらと思います。

参考資料

福岡市博物館 企画展示

<https://museum.city.fukuoka.jp/sp/exhibition/497/#:~:text=%E3%80%8C%E5%A5%B3%E4%B9%97%E7%89%A9%EF%BC%88%E3%81%8A>

元興寺文化財研究所ホームページ

<http://www.gangoji.or.jp/kenkyusho/jap/mokujitopics/mokujitopics.html>

元興寺文化財研究所の見学を通して

L221046 水上采音

元興寺文化財研究所総合文化財センターでは、金属製品や土器、木製品、紙資料などの文化財の調査・保存処理・修復を行っている。施設内は資料の分類によって部屋が別れており、壁がガラス張りになっているため外側から部屋の中を見学した。実際に修復作業を行っている様子を見ることは出来なかったが、パネル展示や職員の方の解説を受けることが出来た。

私が施設内で特に興味を持ったのは、出土品の中でも主に木製品を扱うエリアである。解説パネルや写真を用いて、真空凍結乾燥法やトレハロース含浸法など様々な出土木製品の保存処理方法の詳細とその使い分けについての説明がされた。薬剤の含浸について、出土木材に含まれる水分を薬剤へ置き換える説明と共に薬剤含浸の過程を示したイラストを見て詳しい方法を知ることが出来た。そして、実際に水を含んだ木器を自然乾燥したサンプルと、木器に含まれる水分を合成樹脂に置き換えて処理したものを比べることが出来た。2つのサンプルは色や形が全く異なっており保存処理を行っていないものは、元の長方形の形から変形し、ぐにゃぐにゃと曲がった形になっていたが、保存処理を施したものは綺麗な長方形の形を維持していた。サンプルを見て比較することで保存処理の重要性を再確認した。

また、X線撮影室に実際に入った際には、龍谷大学の文化財科学室に設置されているX線の機材とは異なり人間が入れるサイズの大きさであることには驚いた。実際に施設内で撮影された胎内仏のX線CT写真も見ることが出来た。

木製品を扱うエリア、X線撮影室など、全ての部屋を通して絵画などの伝世品の保存、修理とは全く異なる技法や普段目にする事のない機材ばかりで新たな知識を得ることが出来た。私は絵画の修復に興味を持っており、実際にその作業現場を見学して現場を知るという良い経験が出来た。また、元興寺文化財研究所の見学を通して、絵画だけでなく、出土品の保存処理や修復作業の過程も知ることで文化財の保存修復の重要性を改めて認識する良い機会になった。

夏季課題 博物館を訪れる
～名古屋市博物館について～

L221048 根本力也

私の実家は名古屋市であるので、今回は名古屋市瑞穂区桜山にある名古屋市博物館に行ってきた。名古屋市博物館での見学を通じて、名古屋の歴史や文化に対する理解が深まった。事前調査では、名古屋市博物館が主に名古屋城や江戸時代の歴史に関する展示を行っていることを知り、特に名古屋城の築城過程や徳川家康の影響に興味を持った。しかし、実際に訪れてみると、展示は単に歴史的な事実を説明するだけでなく、当時の人々の生活や文化、さらに近代における名古屋の発展にも触れており、非常に多角的な視点から名古屋の歴史が紹介されていた。

特に印象に残ったのは、名古屋城の模型とその周囲に広がる城下町の展示である。模型を通じて、名古屋城が防衛の要としてだけでなく、政治や経済の中心地としても機能していたことが視覚的に理解できた。また、江戸時代の生活様式や、庶民の文化、商業の発展に関する展示もあり、事前調査では触れられていなかった点についても新たな知見を得ることができた。

さらに、近代産業に関する展示では、名古屋が日本の工業化において重要な役割を果たしたことが強調されていた。特に、織物産業が地域経済に与えた影響についての展示は、名古屋の工業都市としての発展をより深く理解する上で重要であった。見学後には、名古屋城の復元に関する資料をさらに調べた。戦後の再建プロジェクトにおける技術や材料の選定が、文化的価値を保ちながらどのように行われたかについての文献は、博物館での展示内容をさらに補完するものであった。今回の訪問を通じて、名古屋の歴史が単なる過去の出来事ではなく、現代にまで影響を与えていることを強く実感した。

参考文献

<https://www.l.gifu-u.ac.jp/~forest/rilc/nagoyatoshikeikakushi2.html>
<https://www.chubudenkikyokai.com/archive/syswp/wp->

content/uploads/2015/09/9d19fa00e70ed89eb0958815193ee9b8.pdf

史話 名古屋城と城下町 水谷盛光著

夏季見学レポート

L221049 渡辺 早希

元興寺文化財研究所の見学で紙資料の保存修復について興味を持った。その中でも特に興味を持ったのは「漉嵌法」だ。

「漉嵌法」とは、紙漉きの技法を取り入れた修復方法で、糊を使わず虫損資料を修理することができる。まず修復したい資料の破片を仮留めしたあと、裏側から和紙繊維を含ませた水を流し込み、水の流れを利用して本紙の虫穴や周辺に和紙の繊維を嵌め込んで、穴の埋まった本紙をプレスしながら自然乾燥させることで、本紙と流し込んだ和紙繊維それぞれが水素結合するため、糊を使うことなく虫穴を修理することができる。

漉嵌法に興味を持った理由は、紙資料に水を流し込んで修復できることに驚いたからだ。水を流し込むと滲んでしまうのではないかと考えていたため、紙資料に多量の水を用いることができると今回学んだ。もちろん全ての紙資料に漉嵌法を用いることができるのではなく、彩色絵図面などの場合では水に強い顔料の時に用いられる方法である。漉嵌法を行う前には顔料の耐水性を試験して、必要に応じて彩色部分の滲み止めの処理を施している。

なら歴史芸術文化村へ見学した際には、漉嵌法で用いる器具が見学スペースから見える位置に設置されていた。漉嵌法を行っている最中ではなかったが、水を流し込む台や排水装置などの器具や漉嵌法をするために必要なスペースがどのぐらいなのかを実際に見ることができた。

紙資料の修復と聞いて思い浮かぶのは、裏から和紙などで補強する「裏打ち」であったが、新たに漉嵌法もあることを今回学んだ。元興寺文化財研究所の見学で、裏打ちではなく漉嵌法を用いる利点についての解説があった。その中で印象に残っているのは、裏打ちは本紙に重ねて補強するため資料がかさばってしまうが漉嵌法は流し込まれた和紙が本紙の穴の間に入り込むため裏打ちのようにかさ

ばりにくいということだ。和紙繊維を流し込む時は、分厚くならないように注意しながら流し込んで厚みの調節をしているようだ。

最後に、元興寺文化財研究所の見学の時に聞いた「資料の修復にはそれぞれ適した方法があり、その一方で全ての素材に適する修復方法はない。だが、それを探すために研究を続けている。」といった言葉が印象に残っている。今回取り上げた漉嵌法と裏打ちのように同じ紙資料でも使用される素材によって修復方法は異なり、現時点で最適の方法で修復が行われている。将来、一つの方法で同じ分野の資料を修復できるようになった時、この言葉を思い出すだろうと感じた。

元興寺文化財研究所見学報告

L222009 黄筱

元興寺での文化財保存センターの見学は、私にとって非常に有意義な経験であった。文化財がどのように保存・修復されているか、その背後にある技術や知識を実際に目の当たりにすることができ、とても感動した。

まず、紙資料の保存修復を見学したことに特に印象深かった。虫害や湿気が原因で傷んだ古文書や巻物を修復する過程を見て、単に物理的な修復だけでなく、文化財としての価値を保ちながらその歴史的な意義を後世に伝えるという大きな責任を感じた。特に、修復のために使われる薬品や方法が非常に繊細であり、それぞれの資料に適した技術が必要であることがわかった。

また、土器や金属、石材の修復作業についても非常に興味深かった。土器の接合や金属部分の補強など、非常に細かい作業が要求され、すべての工程が完璧に行われることが求められる。修復者たちがどれほど慎重に作業を進める必要があるか、そしてそれが文化財を後世に残すためにどれほど重要であるかを再認識させられた。

X線撮影やX線CTスキャナーを使用して文化財の内部構造を調査する方法を学んだとき、その精密さと重要性に驚かされた。表面だけでは見えない劣化や損傷が、これらの技術を用いることで明らかに

なり、修復作業においてどれほど正確な情報が求められるかを実感した。私自身、普段目にする文化財にはこうした隠れた問題があるとは考えてもいなかったのも、X線技術の力を目の当たりにしてその偉大さを感じた。

そして、写真撮影の重要性についても改めて認識した。修復作業前後の詳細な記録が残されることが、文化財の保存においてどれほど重要であるかを学んだ。X線写真や近赤外線撮影など、目に見えない部分を可視化する技術が、どれほど修復作業に貢献しているかを理解することができ、文化財保存における総合的なアプローチがいかに多岐にわたるかを実感した。

今回の見学を通じて、文化財の保存修復は単なる技術的な作業にとどまらず、過去と未来をつなぐ重要な仕事であることをあらかじめ深く感じた。文化財が時を超えて伝わるためには、これほど多くの人々と技術が関わり、その精緻な作業によって初めて実現するのだと感じた。自分が学んだ知識をもとに、今後も文化財保存の重要性について考え続け、後世に文化を残すための役割を果たしていきたいと強く思った。

参考文献：

『施設見学の手引き』元興寺文化財研究所総合文化財センター

見学レポート—元興寺文化財研究所 総合文化財センターについて—

L222010 張海鵬

昭和 36 年、元興寺に仏教民俗資料調査室が誕生し、これが元興寺文化財研究所の前身となる。平成 25 年に肱塚への移転事業が始まり、移転先の施設は「総合文化財センター」と命名された。元興寺文化財研究所は、仏教民俗資料の研究に 50 年以上の歴史を持ち、仏教民俗学だけでなく、民俗資料から古文書、考古学など様々な分野に研究範囲を徐々に広げ、文化財保存の基礎となる保存修復の分野を強化し続けてきた。

まず、研究所内の各部門の構成について知ることができた。研究所は、埋蔵文化財保存研究グルー

プ、保存科学グループ、文化財調査修復研究グループ、総合企画調査室の4つのグループに分かれている。次に、文化財分野の専門知識や、さまざまな種類の文化財が保存されていく過程を知ることができ、文化財分野への理解が深まった。土器については、修復の前にまず、写真撮影やX線による土器の現状や損傷を調査・記録する。その後、復元部に付着した異物を溶剤で除去し、土器によっては樹脂などで強化する必要がある。そして、破片は接着剤でつなぎ合わせ、欠損部分はエポキシ樹脂などの材料で埋め補填する。最後に、修復前後の写真や使用した材料など、すべての修復過程を詳細に記録する。

木製品については、まず木製品の損傷を確認するための記録が作成され、次に木製品の泥、砂などの残留物のクリーニングが行われた後、調査結果に基づいて保存処理の方法が選定される。大型や立体的な遺物の場合は、薬液に一定期間浸して変型を防ぎ、破損部分を樹脂などで接合・補填する。金属製品については、事前の調査記録、クリーニング、最終的な接合と復元、事後の記録に加えて、独特の処理手続きがある。金属は水分や酸素、塩分などと結合して銹石になりやすいため、金属製品の保存ではそれを防ぐために、鉄製品を薬品に浸して塩分を除去し、樹脂で酸素や水分を遮断する「防錆」という作業が行われる。

今回の見学では、元興寺文化財研究所の各部門構成を知ると同時に、文化財の分野において、特にさまざまな文化財の保存処理についてより深く学ぶことができた。文化財分野に対する理解が深まり、今回の見学で得た知識を今後に活かしていきたいと考えている。

参考文献：

元興寺公式サイト・元興寺文化財研究所公式サイト

<http://www.gangoji.or.jp/>（最後閲覧日：2024.9.28）

最後に

見学記から見学で興味をもち自ら課題を調査したレポートまで内容は千差万別であるが、文化財実習で教えきれない調査や修理現場を受講生が体験できたと感じられた。これもひとえに見学を受け入れて頂いた施設の皆様のおかげであり、再度になるが今一度感謝申し上げます。今年度訪れたなら歴史芸術文化村のように修理現場を常時公開し、学芸員による修理作業の目の前での案内が毎日開催されるなど、文化財修理に注目を向ける取り組みが公的に行われる関西圏は文化財修理への取り組みが盛んである。文化遺産に関わる人材教育として、文化財実習を受講し、見学を機会により一層文化遺産へ興味を持ち、将来的に直接又は間接的に文化遺産へ関心を持ち続けてほしいと思います。

（山田）